五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

石田遺跡 Ⅲ

飯詰小学校、校庭造成にかかわる事前調査（本調査）

K6.第Ⅳ層出土、須恵器（壺）　　K6.第Ⅳ層出土、土師器（甕）

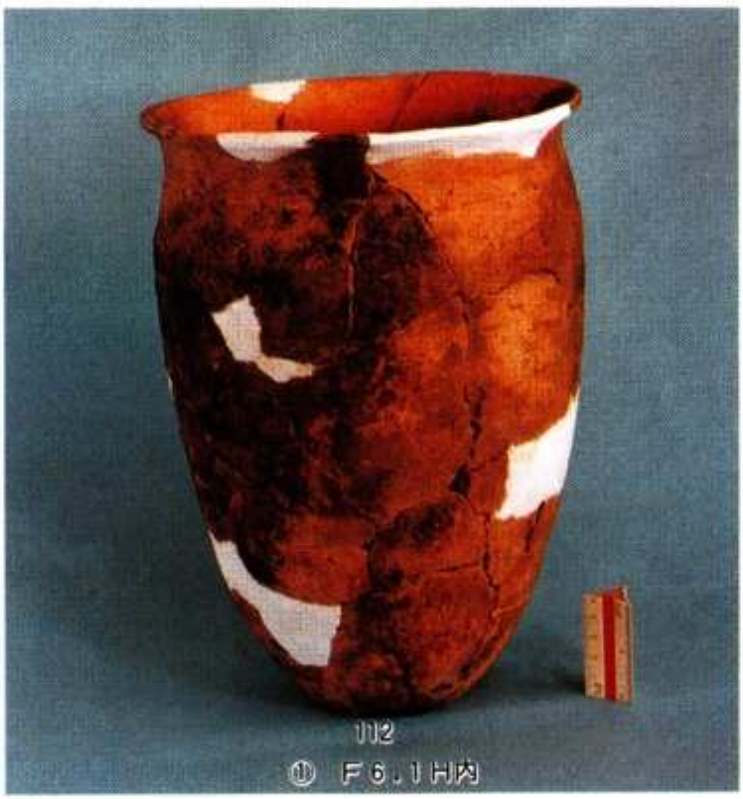
1995年

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市
埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

- 第1集　1968　津軽・前田野目窯跡
- 第2集　1974　原子遺跡
- 第3集　1975　観音林遺跡　（第1次）
- 第4集　1979　狐野遺跡　（第1次）
- 第5集　1980　狐野製鉄遺跡（第2次）
- 第6集　1983　福泉遺跡
- 第7集　1984　観音林遺跡　（第2次）
- 第8集　1985　観音林遺跡　（第3次）
- 第9集　1986　観音林遺跡　（第4次）
- 第10集　1987　観音林遺跡　（第5次）
- 第11集　1988　観音林遺跡　（第6次）
- 第12集　1989　観音林遺跡　（第7次）
- 第13集　1990　観音林遺跡　（第8次）
- 第14集　1991　観音林遺跡　（第9次）
- 第15集　1992　観音林遺跡　（第10次）
- 第16集　1994　石田遺跡　（第2次）
- 第17集　1994　原子城遺跡　（第1次）
- 第18集　1995　石田遺跡　（第3次）

口 絵



土師器甕－口径21.2cm×高さ28.4cm×厚さ1～0.6cm
土師器坏－第13図－701
口径12.5cm×高さ6.5cm厚さ0.3～0.7cm

序　文

石田遺跡は、五所川原駅から北東へ約4.5キロメートル、市北東部を流れる飯詰川の左岸丘陵上にあり、古代、中世の遺跡として、昭和56年と59年の文化財パトロールにより、その存在が調査確認されております。

昨年、同遺跡に隣接する市立飯詰小学校の体育館及び食堂建設のため事前調査を実施しましたが、このたび、同校校庭の造成整備のため事前調査(本調査)を実施したことから、その実在を後世に残すため記録保存することにいたしました。

調査の結果、竪穴式住居跡、平地式住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、地床炉跡等が確認され、また、広口壺の須恵器をはじめ多くの土師器が出土しており、当遺跡は、平安時代から中世、近世にかけての住民が永住した生活跡であったことがうかがわれます。

発掘調査により発見された遺構や遺物については、細部にわたり分析され、本報告書にまとめられましたが、これが当地の歴史や文化の解明に貢献できればと願っております。

今回の調査にあたり、関係各位から多大のご協力を賜りましたことに対し深く感謝申し上げます。

平成7年10月

五所川原市教育委員会
教育長　釜　萢　　裕

〔例　言〕

1）この報告書は、五所川原市教育委員会が実施した【石田遺跡】の事前調査（本調査）の記録である。

2）発掘調査は、飯詰小学校の校庭造成にかかわる事前調査（本調査）として実施された。（遺跡番号０５０４４）

3）発掘調査は、平成７年４月12日より実施され、実働48日間で実施された。

4）本調査のセクション図・平面図は、各調査員が分担して作成した。原図は原則として20分の１で作成した。必要に応じてスケールを入れてある。

5）土層の観察にあたっては、「標準土色帳－新版」を活用した。

6）他の一切（発掘指導・写真撮影・遺物の分類）は、新谷雄蔵が担当した。

7）報告書の作成は、五所川原市教育委員会の依頼によって新谷雄蔵が担当した。

8）出土した遺物のすべては、五所川原市歴史民俗資料館に保管して、当市民の啓蒙に資する。

9）青森県文化課には、種々にわたってご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる次第である。

═ 目　次 ═

◆表紙
◆口絵
◆序文
◆例言
◆目次
【1】 発掘要項 …… 1
◎ 第1図　五所川原市(遺跡付近地形図) …… 3
【2】 グリッド・トレンチの設定 …… 1
◎ 第2図　グリッド及び遺構配置模式図 …… 4
【3】 発掘の経過 …… 2
【4】 検出遺構と出土遺物（表1・表2参照） …… 5
第1節　検出した遺構（表1参照） …… 5
◎ 第3図　第1号竪穴式住居跡平面図（付きカマド層序註記） …… 9
◎ 第4図　第2号竪穴式住居跡平面図（付き層序註記） …… 10
◎ 第5図　第3号竪穴式住居跡平面図（付きカマド層序註記） …… 11
◎ 第6図　第4号竪穴式住居跡平面図（付きカマド層序註記） …… 12
◎ 第7図　第5号竪穴式住居跡平面図（層序註記ーカマドを含む） …… 13
◎ 第8図　第6・7号竪穴式住居跡平面図（付きカマド層序註記） …… 14
◎ 第9図　第1号・第2号・第3号井戸跡平面図（付き層序注記） …… 15
◎ 第10図　第1号・第2号・第3号溝状遺構平面図(付き層序注記) …… 16
◎ 第11図　L2・L3・L4東壁セクション図 …… 17
◎ 第12図　第2号平地式住居跡平面図 …… 18
第2節　出土遺物（第13図－1～9・表2参照） …… 19
a）縄文時代の遺物（石鏃・石槍・エンドスクレーパー） …… 19
b）古代の遺物「須恵器甕・長頸（細口）壺」 …… 19
c）古代の遺物「土師器（坏・甕）」 …… 19
d）古代～中世の遺物（鉄製品） …… 19
e）中世の遺物（青磁・白磁・越前・肥前陶磁器） …… 19

f） 近世の遺物（染付－伊万里焼） …… 20
g） 骨類（年代不明） …… 20
◎ 第13図－１～９遺物の実測図と拓影図 …… 27
【５】むすび …… 28
第１節 遺構について …… 28
第２節 遺物について …… 28
※参考文献
写真図版（plates）
・写１～写４……発掘区の全景と検出遺構 …… 30
・ＰＬ１～４……遺物の出土状況 …… 34
・ＰＬ５～14……出土遺物 …… 38

【1】発 掘 要 項

1)発掘主体者	五所川原市教育委員会		
	代表	教育長	釜 淺 裕
		教育次長	小 野 幸 郎
		生涯学習課長	田 中 茂
		課長補佐	柴 谷 和 夫
		係 長	荒 谷 初 紀
		主 任	秋 元 亨
		主 任	三 橋 久美子
2)遺跡の所在地	青森県五所川原市飯詰字石田 175-1～180-2		
3)発掘担当者	・日本考古学協会会員		新 谷 雄 蔵
4)調 査 員	・北奥文化研究会副会長		永 澤 秀 夫
	・北奥文化研究会事務局長		小 山 英 治
	・北奥文化研究会会員		桜 庭 健 司
5)発 掘 方 法	トレンチ法・グリッド法による。		
6)発 掘 面 積	1600 平方m（遺蹟の約 10%）		
7)発 掘 期 間	平成 7 年 4 月12日 ～ 平成 7 年 7 月30日		
8)整 理 期 間	平成 7 年 5 月 1 日 ～ 平成 7 年 8 月31日		
9)報告書の作成	五所川原市教育委員会の依頼により、新谷雄蔵が作成する。		
10)発掘作業員	10名		

【2】グリッド・トレンチの設定（第 2 図）

- グリッド・トレンチの設定は、第 2 図に示したとおり、東から西へB・C・D・E・F・G・H・J・K・L（Iは、使用せず）とする。
- また、北より南へ 1 ～ 7 の番号を付けた。東西 5 m×南北 5 mのグリッドとした。
- 更に、東西 2 m、南北 5 mのトレンチを設定した。即ち、各グリッドの西の杭から東へ 2 mとして各グリッドの中へ設定した。
- 発掘作業が進むにつれて、東側にD区・C区・B区を設定し、拡張することとした。

・さらに、2度にわたり、表土を剥ぐ為に、バックホーを使用した。(発掘期間が迫っているためである。

【3】発掘の経過

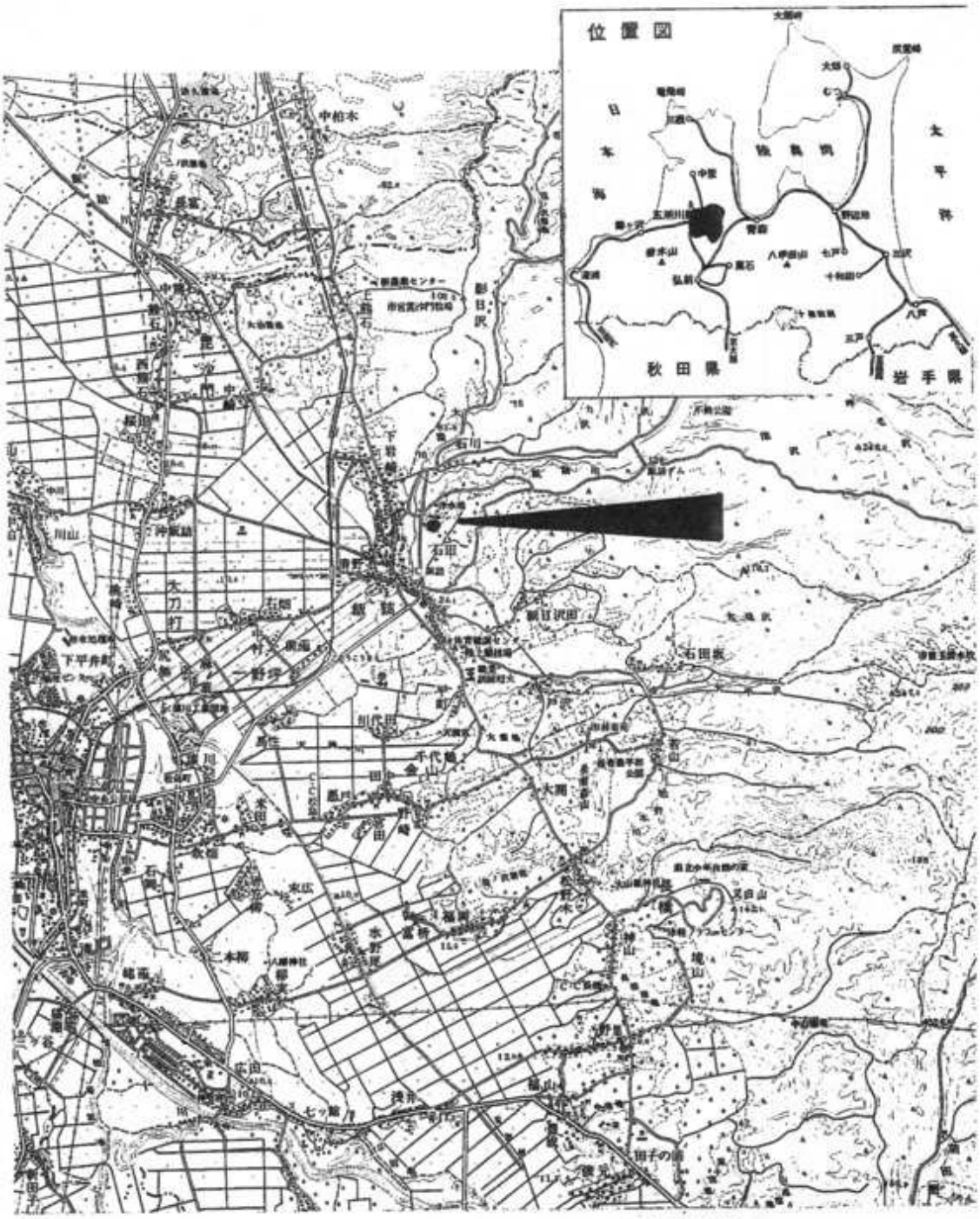
・昭和57年度に、「石田遺跡」の第1次発掘調査（岡田晴正氏の畑）を実施したのであるが、報告書は、未刊行である。この調査において出土したものは土師器の坏形土器のみが出土した。(五所川原市歴史民俗資料館蔵）それ以来、パトロールのたびに注意をして来たのであるが、中国製の青磁や白磁、唐津焼き等が表面採集された。

・即ち、発掘調査やその後のパトロール等で、出土品が土師器であること、中世の遺物が出土すること等から、古代から中世（15世紀後半～16世紀前半）の遺跡であることが判明していた。

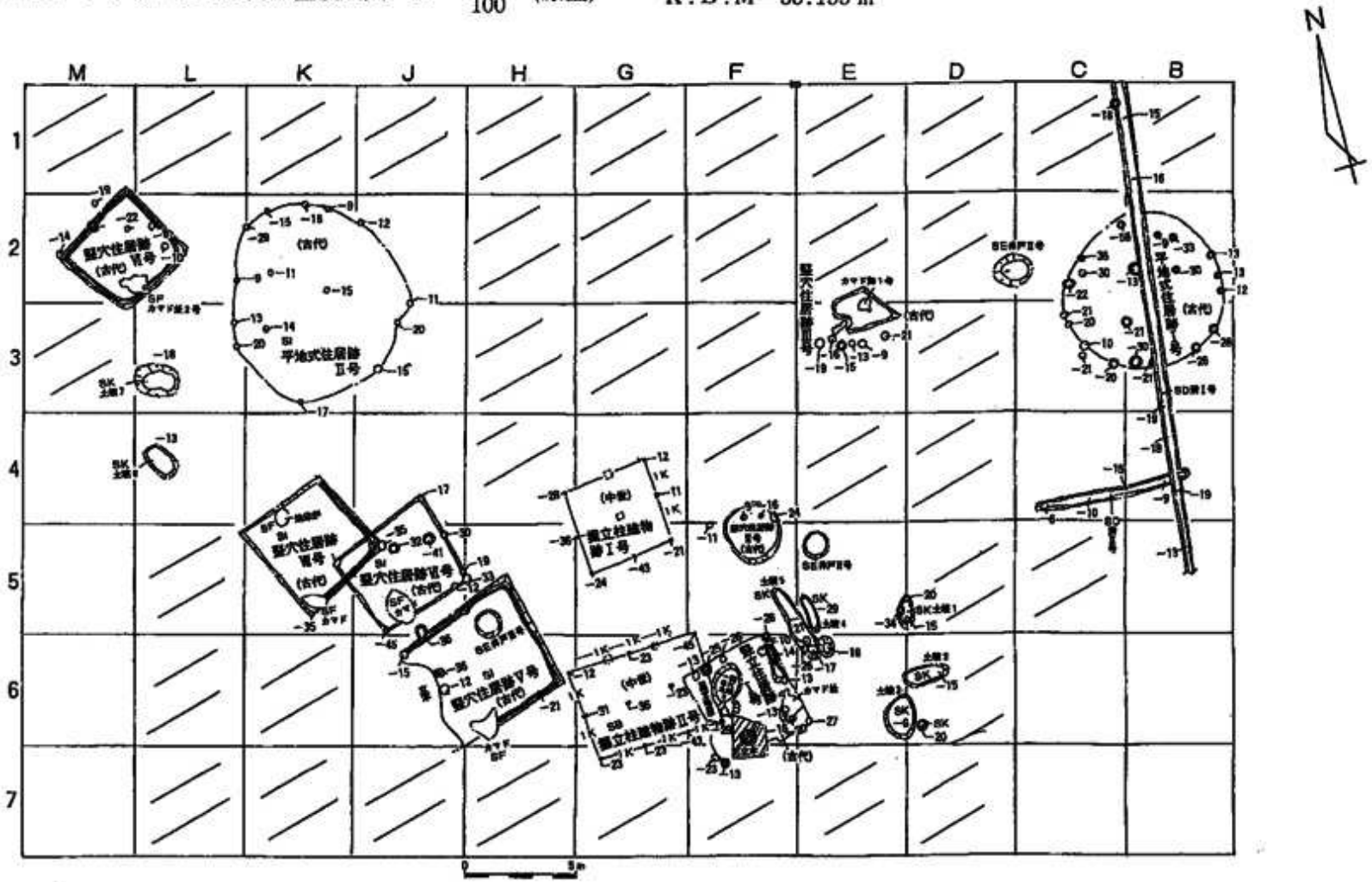
・飯詰小学校の改築に伴って、第2次発掘調査は、食堂及び体育館の増築にかかわる事前調査として約10日間の発掘調査が実施された。(報告書既刊)

・第Ⅲ次調査は、発掘要項に示すとおり、実働48日間で実施されたものである。この間予備調査から、本格的な発掘調査に切り替えられ2度の予算化を実施して発掘調査をしたものである。検出した遺構・出土品は後述する通りである。

五所川原市管内図→遺跡付近地形図　　第１図



第２図　グリッド及び遺構配置模式図　S＝$\frac{1}{100}$（原図）　　K.B.M＝33.155 m



（註）→１Ｋ＝約２ｍである（６尺６寸）、（　）内は年代を示す。斜線＝未発掘地区。

【4】検出遺構と出土遺物（第２図・第３図～第12図参照）

第１節　検出した遺構

・検出した遺構は次の通りである。

---

1)竪穴住居跡－７棟　2)平地式住居跡－２棟　3)掘立柱建物跡－２棟　4)井戸跡－３基
5)土壙－８基　6)地床炉－２基　7)溝－３本

・以上のようになっている。以下に、１）～７)の順に検出した結果について簡単に述べることにする。

１）住居跡（第３～第９図・検出遺構一覧表参照）

ａ）住居跡－竪穴式住居跡は、全部で７棟の出土である。これらの竪穴式住居跡は、いずれも第Ⅳ層(含礫ローム層)とした上面において検出したものである。この竪穴式住居跡は、出土遺物から10～11世紀(平安時代)のものと思われる。

２）平地式住居跡（第２図・第12図参照）

ｂ）平地式住居跡は、２棟の検出である。このものは、第８号、第９号とした住居跡であるが柱穴の配置から住居跡と判定したものである。これらのものは、第Ⅳ層とした。古代の生活面と同じ面であることから、10～11世紀頃のものと考えられる。

３）掘立柱建物跡（第２図参照）

ｃ）このものは、２棟の出土であるが建物の大きさは、２間×２間が一棟、２間×３間が一棟の２棟であるが、これらの建物は、掘り方が方形で、柱は、丸柱であった。これらの建物の外に、掘り方が方形で、柱が丸いものや方形のものが検出されていることから、ほかの建物があったものと推定されるところである。（なお、念のために述べるが、一間は6.6尺である）

4）井戸跡（第9図参照）

d）井戸跡は、全部で3基検出されている。即ち1号・2号・3号の井戸跡であるが、このうち3号とした井戸跡は、深く確認面から約3mで調査を打ち切った。

この3号とした井戸跡は、5号とした竪穴式住居跡が埋まった後に掘られたもののように観察されることからその年代は、住居跡より新しいものと観察される。

5）土壙（第2図参照）

e）土壙としたものは、全部で8基の出土である。プランは、不正な円形・小判形が多く見られる。(特筆すべきは、第1号とした住居跡内より、縄文時代晩期の土器(条痕文土器)が出土した。多分住居跡を構築する以前に造られたものと思われる。

6）地床炉（第5図・第7図・第10図参照）

f）地床炉としたものは、住居跡に伴うもの(カマド跡)は別にして、住居跡に関係がないものを3基検出した。此のうち第3号とした小形の住居跡に伴うものは、住居跡と無関係であり、また、第4号とした住居跡のカマド跡も第4号住居跡とは無関係であることが観察された。

7）溝状遺構（第10図参照）

g）第10図に示すように溝状遺構は、長い小溝のみ2条検出したが、特に第1号とした溝状遺構には、出土遺物が皆無で年代不明である。他の溝状遺構も出土遺物が無く年代が不明であった。以上で検出した遺構を終わり、次に出土遺物について述べることにする。

(表1) 検出遺構一覧表

a) 住居跡 (ST) (第3・4・5・6・7・8・9・10・11図参照)

名前	グリッド カマド位置	長辺×短辺	年代	プラン 形態	備考
第1号H	F6 東隅	4.5×4.0m	平安時代	プラン 方形	土壙 (小判型ー縄文晩期)
第2号H	F4・5 無し	径3.2×2.6m	年代不明	プラン 円形	
第3号H	E2・3 西中央	3.8×3.4m	平安時代	プラン 小型方形	地床炉は、年代が新しい。
第4号H	L・M1・2・3 西隅	6.0×5.3m	平安時代	プラン 方形	柱穴が無い。
第5号H	H5・6 . J5・6 西隅	5.2×4.0m	平安時代	プラン 方形	四隅に柱穴がある。
第6号H	H5. J4・5. K5 東隅	4.9×4.6m	平安時代	プラン 方形	四隅に柱穴がある。
第7号H	J5. K4・5. L5 東隅	4.50×4.0m	平安時代	プラン 方形	四隅に柱穴がある。
b) 第8号H	b2. c2. b3. c3 平地住居跡	径 7.5×6.2m	平安時代	プラン 不正円形	柱穴の配置による。
b) 第9号H	L2. K2. J2. L3. K3. J3. 平地住居跡	径 8.75×7.55m	平安時代	プラン 不正円形	柱穴の配置による。

c) 掘立柱建物跡 (SB) ※1間=6尺6寸 (約2m) である。

建物跡	東西×南北	柱間隔	位置 グリッド	建物跡 備考
第1号掘立柱建物跡	3.8×3.9m	X1. X2. X3.=1.9m Y0. Y2=2.0m	グリッド H・J4	掘り方ー方形、柱ー円形
第2号掘立柱建物跡	4.0×6.0m	X1. X2. X3. X4=2m Y0. Y2. Y3. Y4=2m	グリッド H・J6	掘り方ー方形、柱ー円形

d）井戸跡（ＳＥ）（第９図参照）

区　　分	位置・グリッド	長径×短径	深　さ	備　　考
第１号井戸跡	E5	1.35×1.25m	1.8m	第２・３号とも直口である。
第２号井戸跡	CD2	2×1.6m	1.2m	風りん状Pitあり。
第３号井戸跡	H5・6	1.30×1.2m	4＋α	４号住居跡の中で検出。

e）土壙（ＳＫ）（第２図参照）

区　分	グリッド	長径×短径	深　さ	備　考（プラン）
第１号土壙	ＤＥ－５	1.6×0.6m	0.15m	不正円形
第２号土壙	ＤＥ－６	2.2×0.8m	0.15m	隅丸方形
第３号土壙	ＤＥ－６	2.5×1.6m	0.08m	不正円形
第４号土壙	Ｄ－７	0.5×0.5m	0.20m	円形
第５号土壙	Ｅ－５	1.8×0.4m	1.8×0.4m	不正長円形
第６号土壙	ＦＥ－５・６	3.6×0.7m	0.09m	不正長円形

※土壙は、全部で10基出土したが、４基は風倒木のため割愛した。

f）地床炉（ＳＦ）（第12図参照）

区　分	グリッド	プラン	高　さ	特　　徴
第１号地床炉	Ｅ２～３	不正円形	17cm	焼土一約10cm
第２号地床炉	Ｋ４	不正円形	約10cm	焼土一約10cm
第３号地床炉	Ｌ２	不正長円形	約19cm	焼土一約19cm

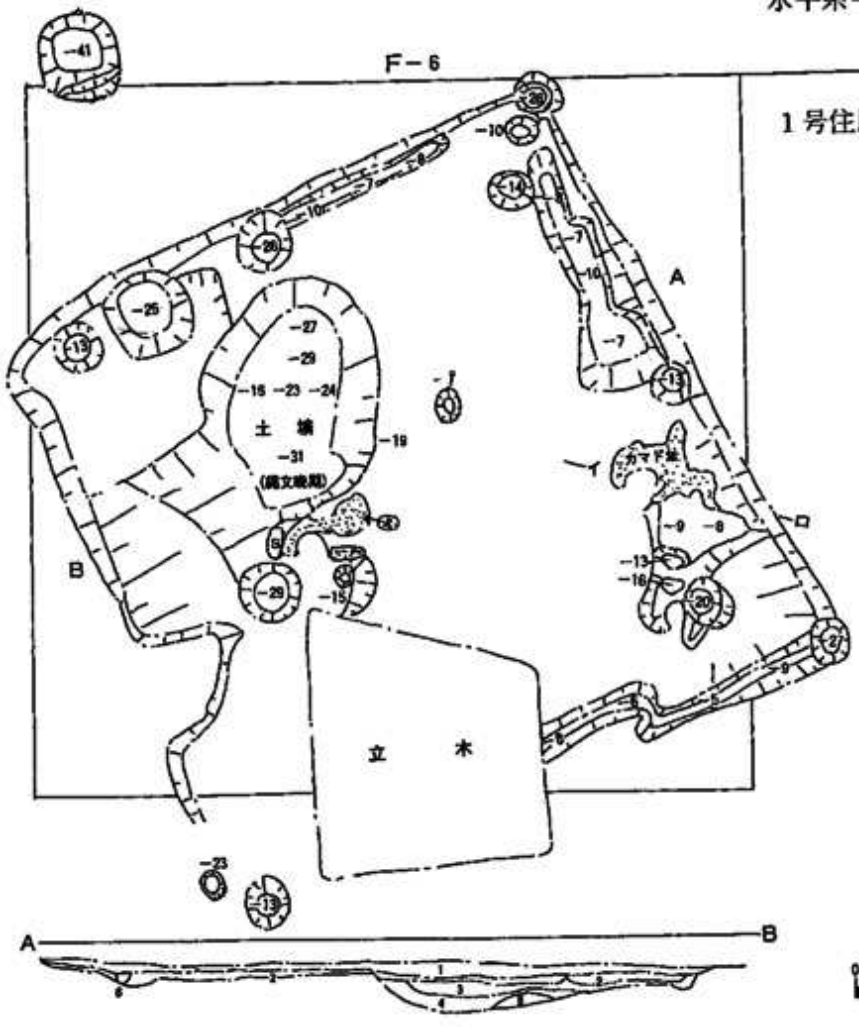
g）溝（第10図参照）

区　分	グリッド	幅と長さ	深　さ	特　　徴
第１号溝	ｂ１～ｂ５	0.75×22.3m	0.15～0.25m	小　溝
第２号溝	ｂ４～ｃ４	0.74×30.04m	0.04～0.15m	小　溝

※小溝は、種里城の小溝の基準による。（20～40cm＝幅）

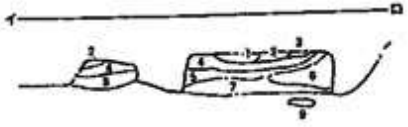
第3図　F－6　第1号竪穴住居跡平面図　S＝$\frac{1}{20}$（原図）

H7．5．12 曇
KBM＝33.155m
E・L＝32.2cm
水平糸＝116.0cm



1号住居跡内カマド跡断面図　S＝$\frac{1}{10}$

H7．5．24 曇
KBM＝33.155m
E・L＝32.2cm
水平糸＝117.5cm

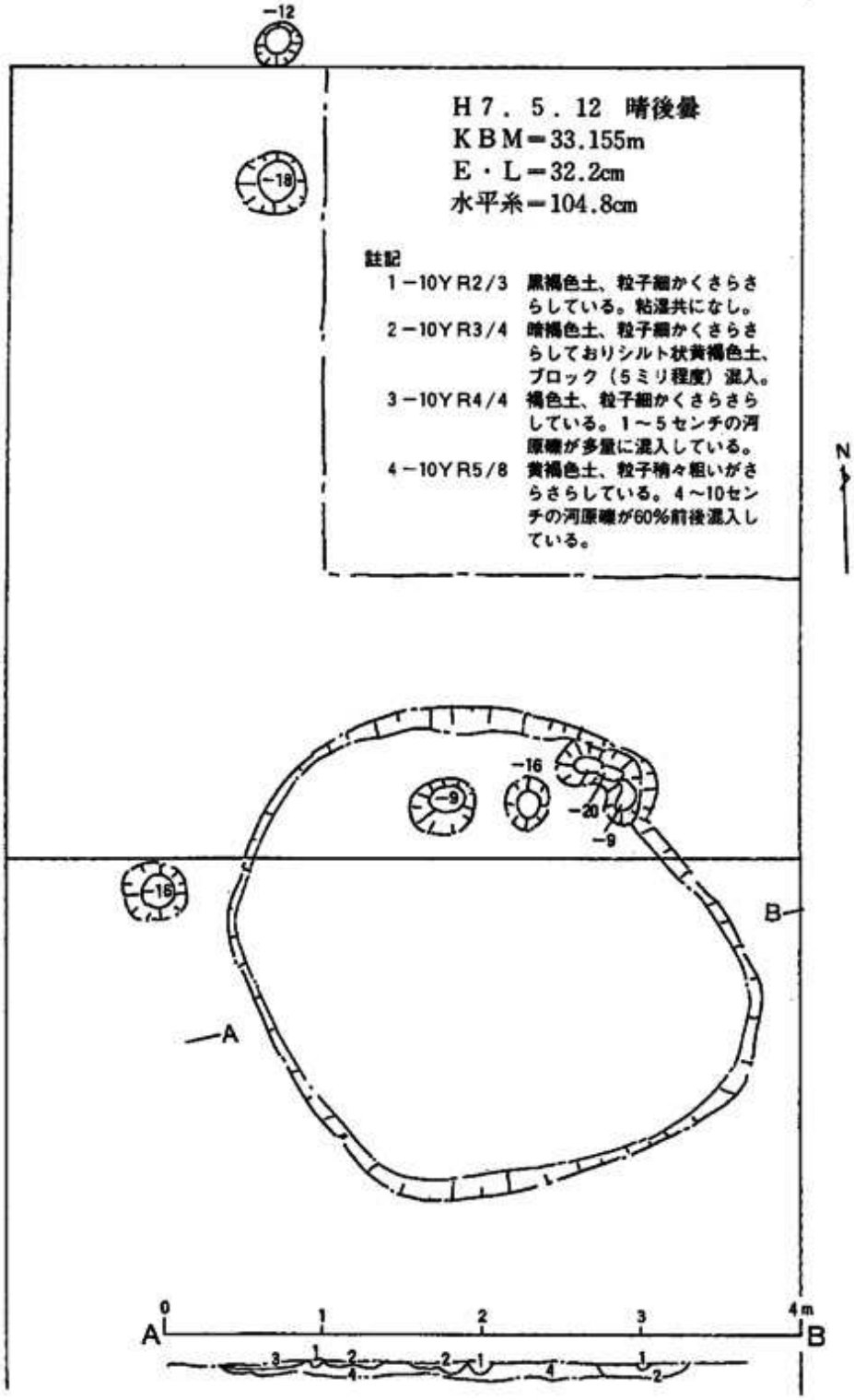


註記
1－2.5YR4/6　赤褐色土。
2－2.5YR3/4　暗赤褐色土。
3－2.5YR2/4　極暗赤褐色土。
4－2.5YR2/2　極暗赤褐色土。
5－2.5YR3/2　暗赤褐色土。
6－2.5YR3/1　暗赤灰色土。
7－2.5YR2/3　極暗赤褐色土。

H7．5．24 曇
KBM＝33.155m
E・L＝32.2cm
水平糸＝116cm

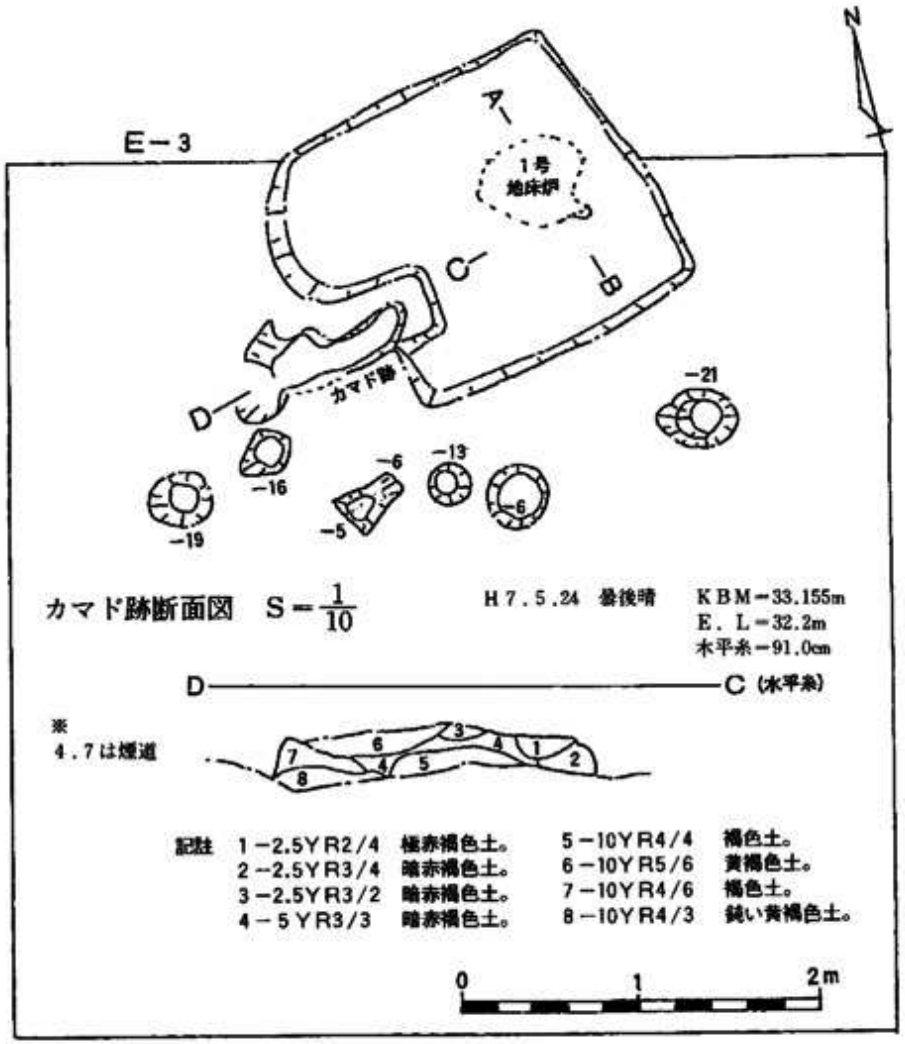
註記
1－10YR3/4　暗褐色土、粒子細かくさらさらしている。粘湿共にない。
2－10YR4/4　褐色土、粒子細かくさらさらしている。粘湿なし。
3－10YR4/3　鈍い褐色土、粘湿共になし、5cm内外の扁平河原礫、鈍い黄褐色土、5/4粘土ブロック混入。
4－10YR3/3　暗褐色土、粒子細かく粘性若干あり、5cm前後の河原礫混入。
5－10YR3/3　暗褐色土と10YR4/6褐色土との混合したもの。さらさらしている。
6－4層に10YR6/8明黄褐色土の混入層。

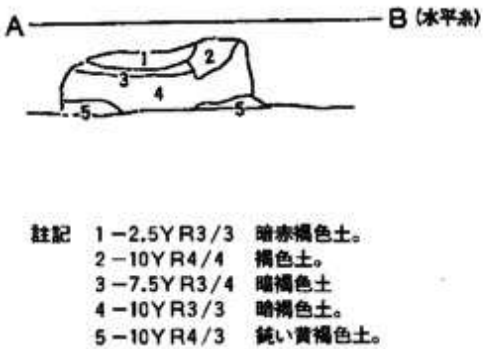
第４図　第２号竪穴住居跡平面図　S＝$\frac{1}{20}$（原図）



第５図　第３号竪穴住居跡平面図及び第１号地床炉・カマド跡断面図　S＝$\frac{1}{20}$（原図）

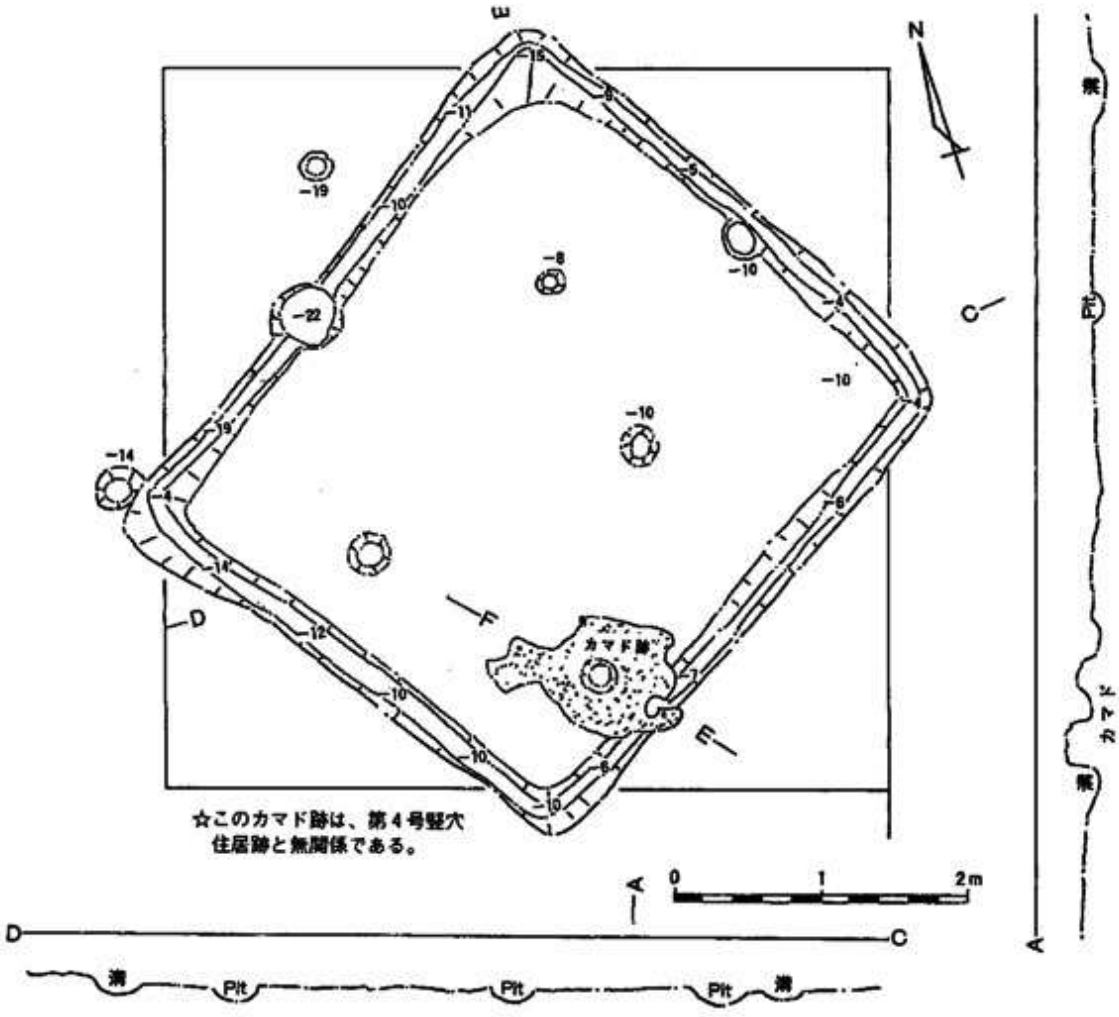
H７．５．11　晴
KBM＝33.155m
E．L＝35.6cm





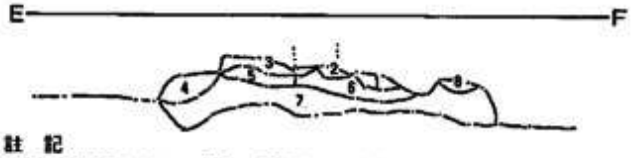
第６図　第４号竪穴住居跡平面図　S＝$\frac{1}{20}$（原図）

Ｈ７．５．26　晴
ＫＢＭ＝33.155m
Ｅ．Ｌ＝32.2cm
水平糸＝72.0cm



２号カマド跡　断面図　S＝$\frac{1}{10}$　Ｈ７．５．26　晴

ＫＢＭ＝33.155m
Ｅ．Ｌ＝32.2cm
水平糸＝72.0cm

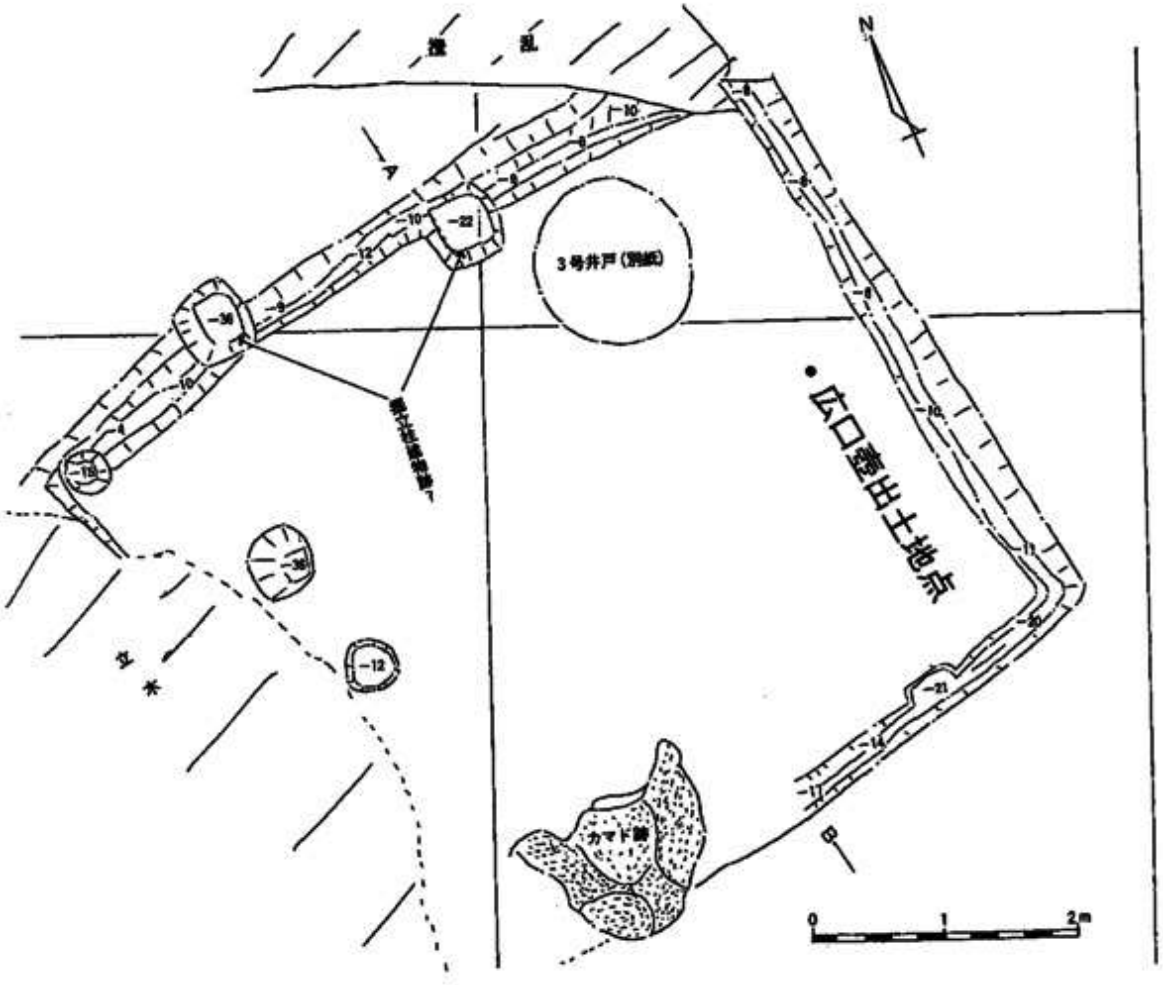


註　記

1．10ＹＲ4/6　褐色、粒子細かく粘湿共に少い。
2．2.5ＹＲ3/4　暗赤褐色土。粒子細かく粘湿共に少い。
3．2.5ＹＲ3/3　暗赤褐色土。粒子細かくさらさらしている。
4．2.5ＹＲ2/3　極暗赤褐色土。粒子細かくさらさらしている。
5．2.5ＹＲ3/6　暗赤褐色土。粒子細かくさらさらしている。
6．５ＹＲ4/4　鈍い赤褐色土を主体にして2.5ＹＲ3/6暗赤褐色土と10ＹＲ4/4褐色土。５㎜～１㎝前後の粘土ブロック混入。
7．7.5ＹＲ3/3　暗褐色土。粒子細かく粘性若干あり。ここが煙道部である。
8．2.5ＹＲ5/4　鈍い赤褐色土。レンガ状ブロック混入する。

第７図　第５号竪穴住居跡平面図　S－$\frac{1}{20}$（原図）

Ｈ７．６．13　晴、14　曇
ＫＢＭ－33.155m
Ｅ．Ｌ－32.2cm
水平糸－115.0cm



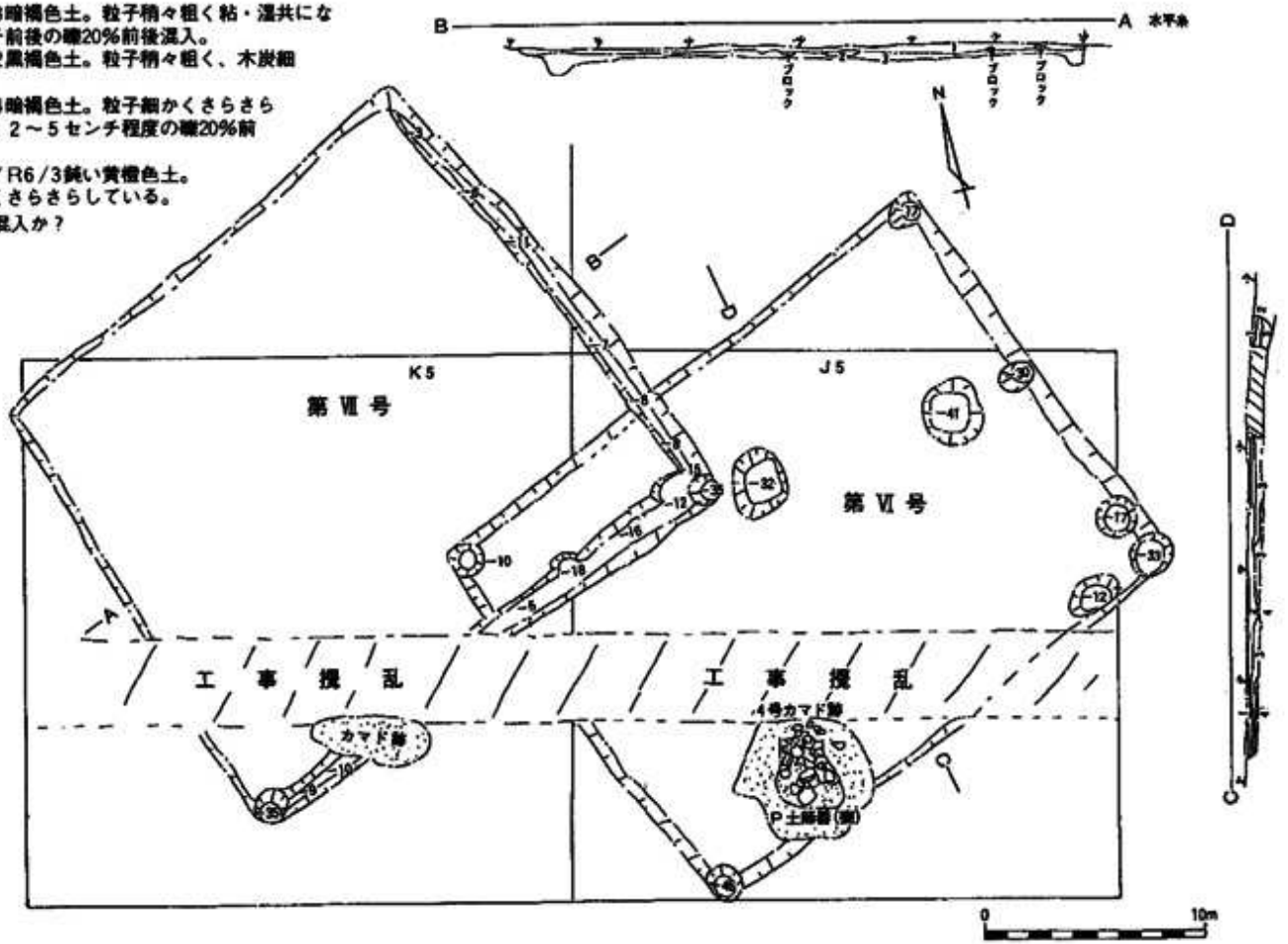
註記

1．10YR2/3　黒褐色土。粒子細かく湿性若干あり。
2．10YR3/2　黒褐色土。粒子粗々粗く粘湿共になし。２～５cmの礫10%混入。
3．10YR3/4　暗褐色土。粒子細かくさらさらしている。３～６cm位の礫混入。
4．10YR4/4　褐色土。粘・湿共になし。
5．10YR4/4　褐色土。粒子細かくさらさらしている。
6．10YR3/3　暗褐色土。２cm前後の礫と１cm前後の明黄褐色の粘土ブロック混入。
7．10YR3/3　暗褐色土。明黄褐色の粘土ブロック10%混入。
8．10YR3/3　暗褐色土に明黄褐色土（10YR6/6）が50%づつ攪乱された形で混在。
9．10YR3/4　暗褐色土。粒子細かく粘・湿共にある。

第８図　第６号・第７号竪穴住居跡平面図　S－$\frac{1}{20}$（原図）

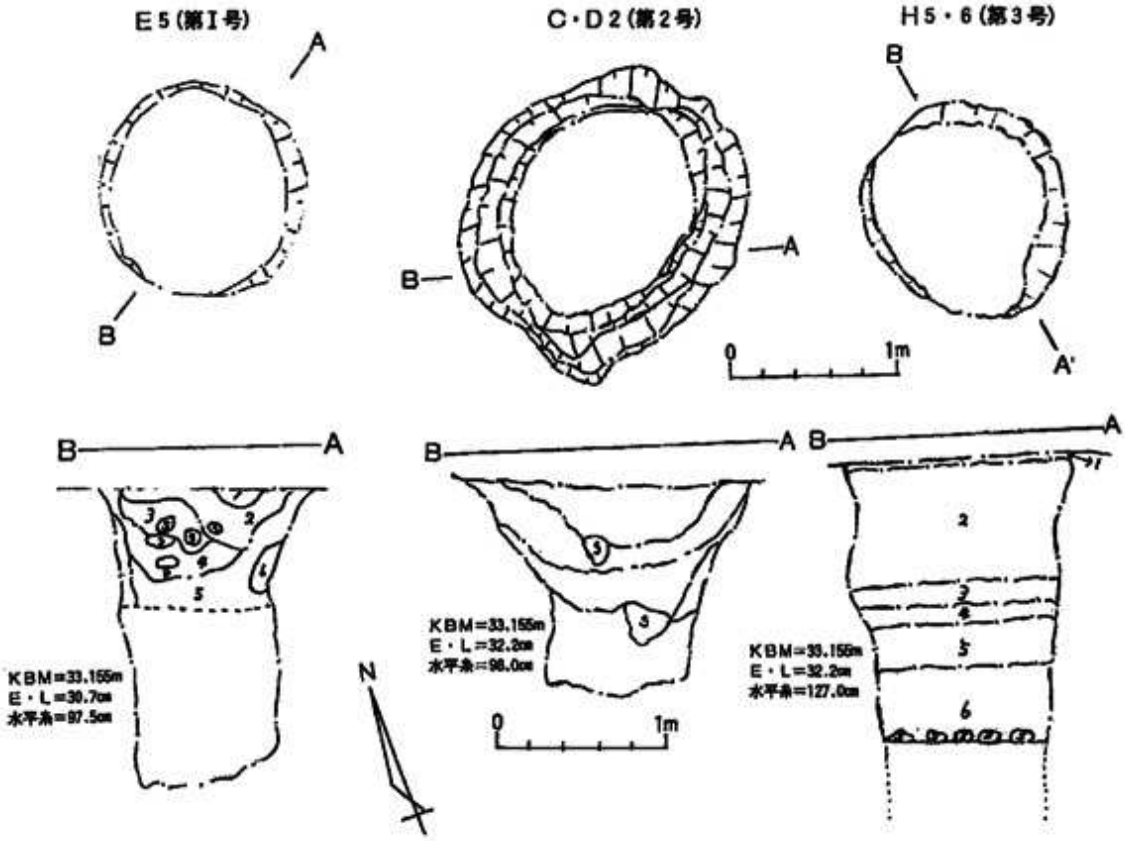
Ｈ７．６．12　晴
ＫＢＭ＝33.155m
Ｅ．Ｌ＝32.2cm
水平糸＝112.0cm

註　記
1－10ＹＲ3／3暗褐色土。粒子稍々粗く粘・湿共になく２センチ前後の礫20％前後混入。
2－10ＹＲ3／2黒褐色土。粒子稍々粗く、木炭細粒混入。
3－10ＹＲ3／4暗褐色土。粒子細かくさらさらしている。２～５センチ程度の礫20％前後混入。
ブロック－10ＹＲ6／3鈍い黄橙色土。粒子細かくさらさらしている。他からの混入か？



註　記
1－10ＹＲ3／4暗褐色土。粒子細かくさらさらしている。１～２センチの礫40％混入。
2－10ＹＲ4／4褐色土。粒子細かくさらさらしている。５ミリ前後の礫混入。
3－10ＹＲ3／4暗褐色土。粒子細かくさらさらしている。２～３センチ大の礫が混入。
4－10ＹＲ4／6褐色土。粒子稍々粗くさらさらしている。地山への漸移層である。
地山－10ＹＲ5／6黄褐色土。礫50％以上混入。床面を形成。

第９図　第１号・第２号・第３号、井戸跡平面図、断面図　S＝$\frac{1}{20}$（原図）



（第　１　号）

註　記

１－10ＹＲ2／2黒褐色土。粒子細かくシルト状、さらさらしている。
２－10ＹＲ3／1黒褐色土。粒子細かく粘・湿若干あり。
３－10ＹＲ2／3黒褐色土。粒子細かく粘・湿共に若干あり、挙大の礫あり。
４－10ＹＲ3／2黒褐色土。粒子細かく粘・湿共に中程度１～２センチの河原礫混入。土師器底部検出。
５－10ＹＲ3／4暗褐色土。粒子稍々粗く湿性大である。１センチ前後の河原礫10％前後混入。
６－10ＹＲ4／4褐色土。粒子稍々粗いが粘・湿共にあり、黄褐色の粘土ブロック混入。４～６センチの河原礫混入。

（第　２　号）

註　記

１－10ＹＲ2／3黒褐色土と10ＹＲ5／6黄褐色土の混合土。粘性・湿性ややあり、河原礫５％位混入。
２－10ＹＲ2／2黒褐色土。粒子細かく粘・湿若干あり、河原礫５％位混入。
３－10ＹＲ4／3鈍い黄褐色土を主体にして10ＹＲ3／1黒褐色土の混合層である。
４－10ＹＲ2／3黒褐色土。粒子細かく粘性・湿性共に中程度ある。
５－10ＹＲ4／4褐色土を主体にして、10ＹＲ6／6明黄褐色土と５ＹＲ6／3にぶい燈色土が混入。
６－10ＹＲ4／4褐色土。粒子やや粗いが粘・湿共に中程度。
７－10ＹＲ6／6明黄褐色土。湿性・粘性共に中程度。

（第　３　号）

註　記

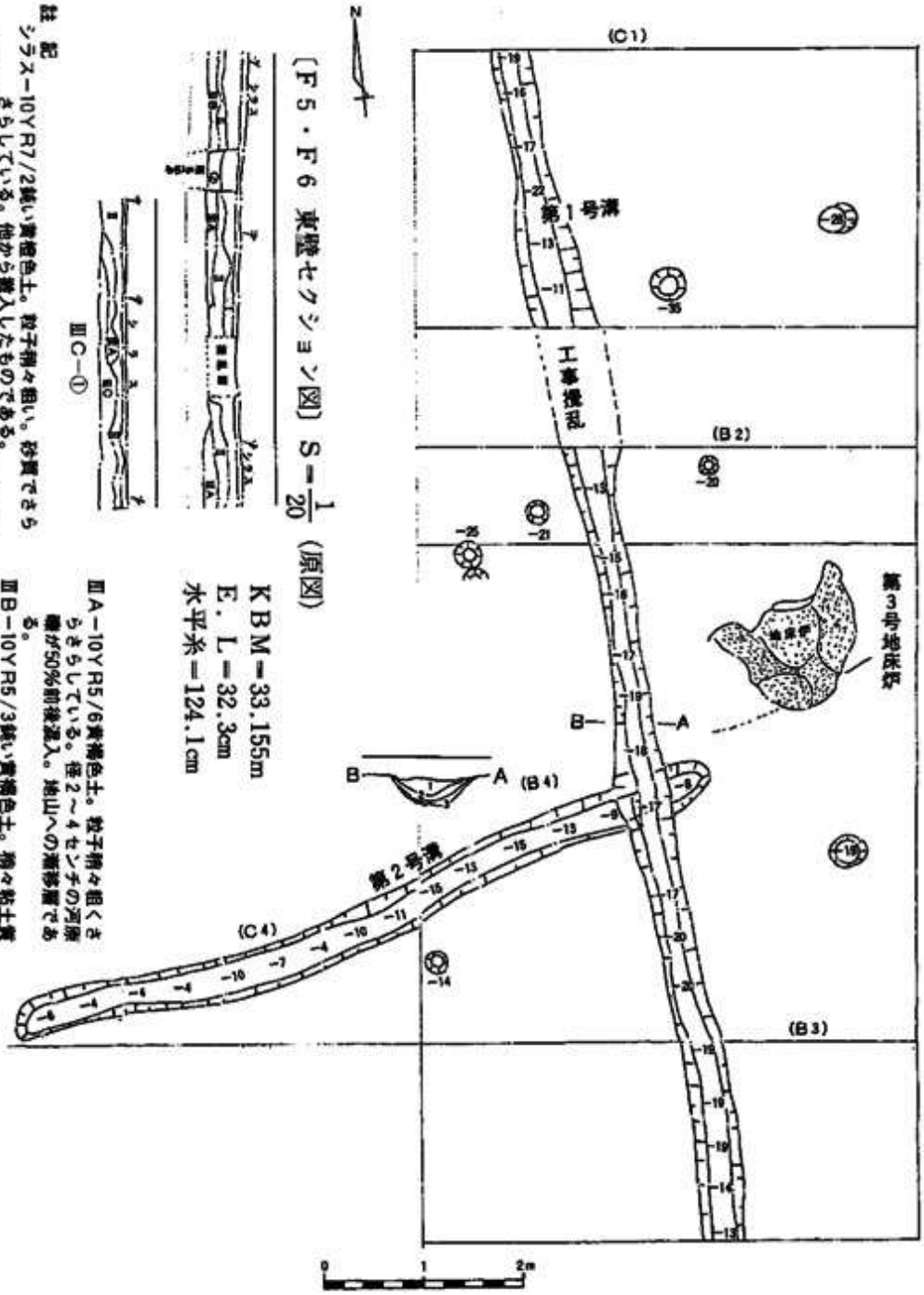
１－10ＹＲ5／4鈍い黄褐色土。粒子粗くざらざらしている。３～６センチの扁平石混入。
２－10ＹＲ6／8明黄褐色土。粒子細かくさらさらしている。５ミリ～１センチ前後の細礫が30％程度混入。
３－10ＹＲ5／6黄褐色土と10ＹＲ4／6褐色土との混入で砂質層である。
４－10ＹＲ5／8黄褐色土と10ＹＲ7／6明黄褐色土との混含土で砂質層である。この層には２センチ程度の礫50％程度が混入。
５－10ＹＲ8／2灰白色土をベースに10ＹＲ6／8明黄褐色土が20％混入。粒子細かく粘・湿中程度。
６－10ＹＲ7／8黄燈色土の中に５センチ～10センチ位の礫が90％位混入。

第10号　第１号・第２号、溝状遺構平面図（付 カマド跡）セクション図

カマド跡、溝跡、柱跡（セクション図）

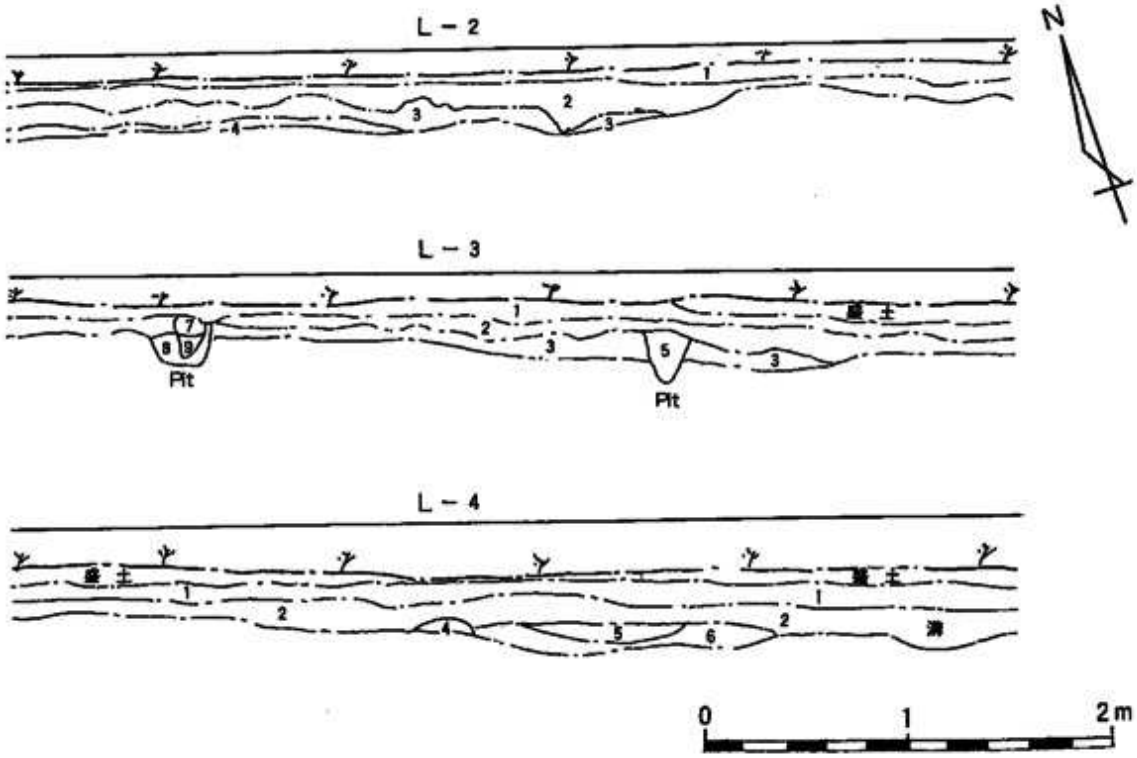
第１号溝平面図　S＝$\frac{1}{20}$（原図）

Ｈ７．６．２　晴
ＫＢＭ＝33.155m
Ｅ．Ｌ＝32.3cm



第11図　L２・L３・L４、東壁セクション図　S＝$\frac{1}{20}$（原図）　　H７．５．23　晴後曇

KBM＝33.155m
E．L＝32.2cm
水平糸＝73.0cm

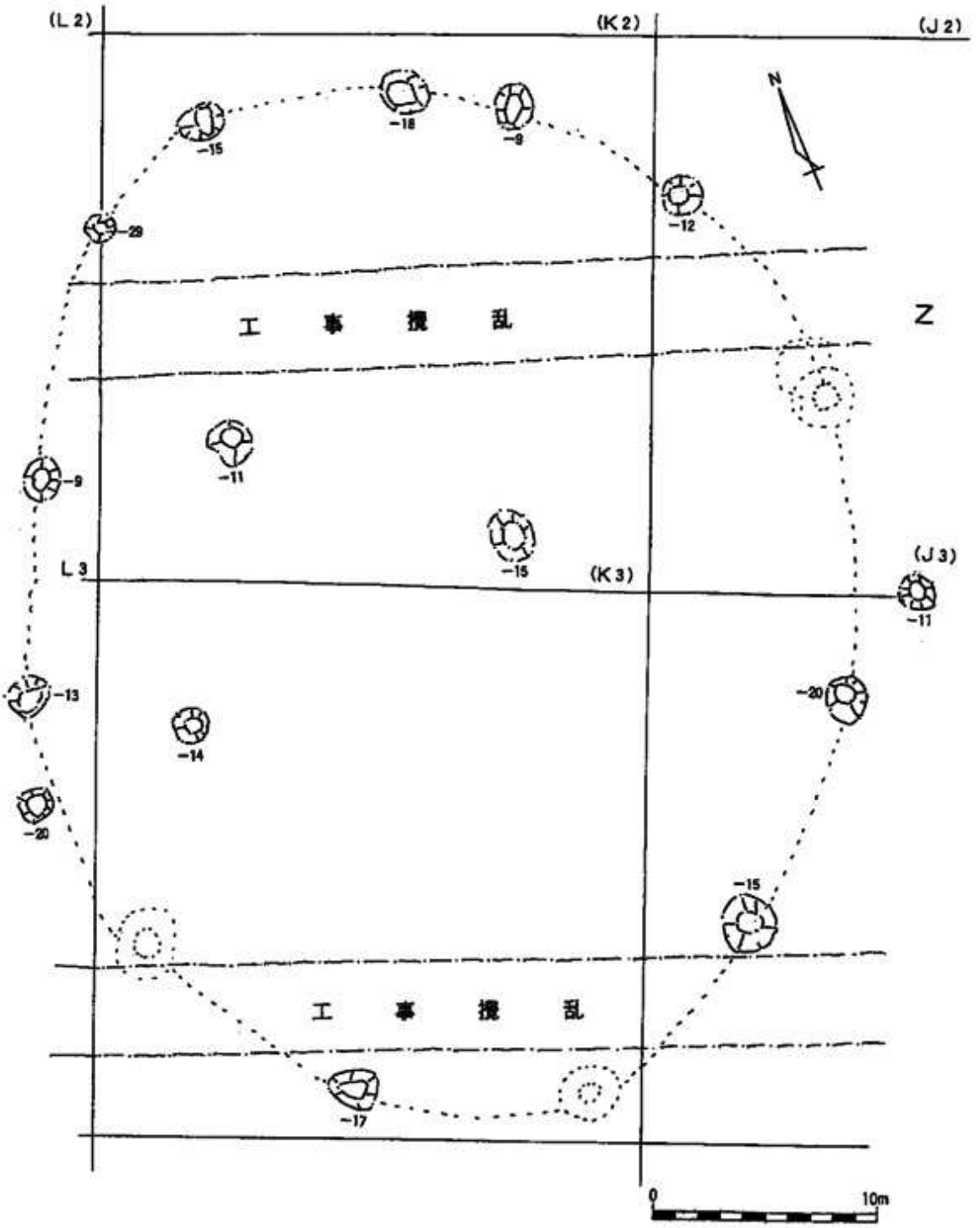


註　記

盛土－2.5Y R6/4鈍い黄色土。シラスで稍々粗い砂質である。
1－10Y R3/2黒褐色土。粒子細かくシルト状で、粘・湿共に若干あり。草木根混入・１センチ前後の礫が若干混入。
2－10Y R2/3黒褐色土。粒子細かく粘・湿共に若干あり、６～８センチ大の礫混入。
3－10Y R4/2灰黄褐色土。粒子細かく粘・湿共にあり、４～６センチ大の扁平礫混入。
4－10Y R4/4褐色土。粒子細かく粘・湿若干あり。５センチ前後の礫混入。
5－10Y R2/3黒褐色土。粒子稍々粗いが粘・湿若干あり。
6－10Y R4/3鈍い黄褐色土。粒子稍粗く粘・湿中程度ある。
7－10Y R5/6黄褐色土。粒子粗く５ミリ前後の礫50%混入。
8－10Y R5/6黄褐色土。粒子粗く粘・湿あまりない。
9－２層と７層の混合層である。

第12図　第２号平地式住居跡平面図　S＝$\frac{1}{20}$（原図）

Ｈ７．６．13
ＫＢＭ＝33.155m
Ｅ．Ｌ＝32.2cm



第2節　出 土 遺 物『石田遺跡(第1・2・3次)年代別一覧表(表2)、第13図－1～9参照)』

・出土した遺物を分類すると、下記のようになる。

---

a）縄文時代の遺物　b）古代の遺物　c）中世の遺物　d）近世の遺物

・上のように分けられるが、このうち、a）とした縄文土器は、破片を含めて35片の出土である。このうち、縄文時代後期の「十腰内Ⅰ群土器」が大部分で中には、縄文時代晩期の条痕文土器が13片程混じっている。このことは付近に「福泉遺跡－縄文晩期の遺跡」が所在する事からも肯定されるところである。

なお、これらの土器については、第1号とした住居跡の中に所在した小判型土壙からも出土したので、この期の土壙とした。

さらに、石鏃－1、石槍－1、エンドスクレーパー1の出土があったが、これらのものの年代は不明である。

・b）とした古代の遺物では、須恵器・土師器があげられるが、須恵器は、さらに、甕形と長頸（細口）壺、及び杯形須恵器に分類される。前者は、34片、後者は、12片の出土である。また、須恵器の杯形の出土が僅かに6片の出土である。また、広口壺が1個体出土した。

・c）古代の遺物としたもののうち、土師器について述べると、このものも、甕形 杯形に分けられる。甕形は、細片を含めて、348片、杯形は25片の出土である。また、須恵系の土師器も、6片程出土している。このように土師器のうち、特に甕形が多い。

・d）鉄製品－このものは、古代に入るのか、または、中世に区分するのかが、成分分析をしていないので、目下のところ年代については不明である。

これらの鉄製品は、全部で12片の出土であった。

・e）中世の遺物－出土した遺物は、下記のとおりである。

1）越前焼　2）青磁　3）白磁　4）瀬戸、美濃焼　5）染付

・以上のように分けられるが、出土した数は、先に示した一覧表に述べたとおりである。即ち、越前焼・青磁・白磁・瀬戸、美濃焼(灰釉)・染付(伊万里焼－7片)等は、いずれ

も15世紀～16世紀のもので、中世のものである。

- f）近世の遺物－染付(伊万里－7片)・織部焼－2片の出土である。このものは、19世紀～20世紀のものであろうか？
- g）骨類－このものは、約10片程の出土であって、多分獣骨であろう。他に、青銅製品としてキセルや銭貨(12枚)等の出土があったことを付記しておきたいと思う。(年代不明)

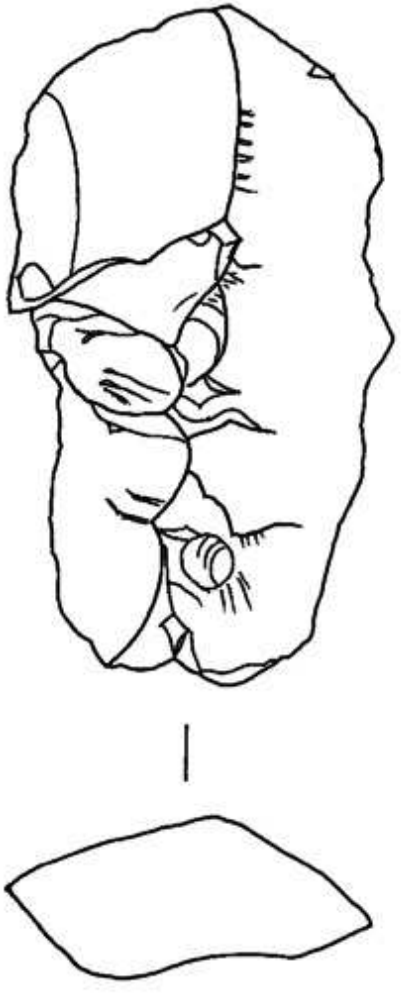
石田遺跡(第1・2・3次)発掘調査出土、土器年代別一覧表

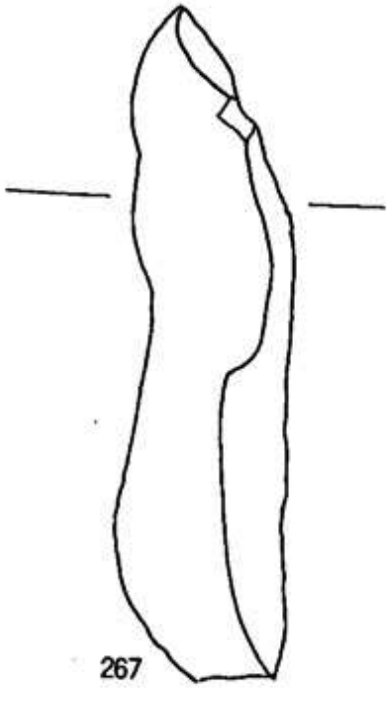
(表2)

年度(出土数)	種　別	年　代	特　徴	備　考
	須恵器(甕)	10世紀	大甕(タタキ目)	前田野目産
	長頸(細口)壺	10世紀	壺　(ロクロ痕)	同上
	土師器(杯)	11世紀	杯のみ出土した。	／
〔第1次〕	青磁(皿)	15世紀～約16世紀	口縁端反(中国)	窯不明
(1987)	白磁(皿)	15世紀～約16世紀	同上	龍泉窯
	唐津焼	17世紀～約17世紀	波状文(見込み)	肥前陶器
	染付(皿－伊万里)	17世紀～約17世紀	高台内(沈線文)	肥前磁器
発掘調査	越前焼(擂鉢)	15世紀～約16世紀	見込み(擂鉢)	条痕文多し
	縄文土器	約3000年前	後期(十腰内Ⅰ式)	沈線文
	瓦質土器	15世紀～約16世紀	庶民の器である。	黒色である。
〔第2次〕	須恵器	10世紀	タタキ目	前田野目産
(1994)	土師器	11世紀	ケズリあり。	底面(細砂)
	染付	17世紀～約18世紀	伊万里(17世紀)	18世紀染付
	鉄製品	年代不明	／	／
発掘調査	擦文土器	12世紀	器内、外とも擦文	ハケメあり
(225)	須恵器(甕・坏・広口壺)	10世紀	タタキ目	前田野目産(他県)
(562)	土師器(甕・杯)	11世紀	甕(底面-細砂付着)	平安中期
(14)	鉄製品	年代不明	タガネを含む。	／
(4)	越前焼	15世紀～16世紀	擂鉢	条痕不明
(2)	青磁	15世紀～16世紀	皿・鍋	口縁部内傾
〔第3次〕	白磁　(2)	16世紀	皿　(志野？)	砂目積
(1995)	染付　(17)	17世紀～18世紀	伊万里焼	仏化具・食膳具
(3)	唐津焼	17～18世紀	碗	肥前磁器
(3)	瀬戸・美濃焼	15～16世紀	碗　(灰釉)	高台付き
(4)	織部焼？	19世紀～20世紀	碗　？	／
(1)	青銅製品	年代不明	キセル	／
(12)	銭貨	年代不明	宋銭or(明銭)	2枚破損
	獣骨	種別不明	出土状況－散布	／
発掘調査	カーボン(約200ｇ)	／	b2trⅡ層出土	／

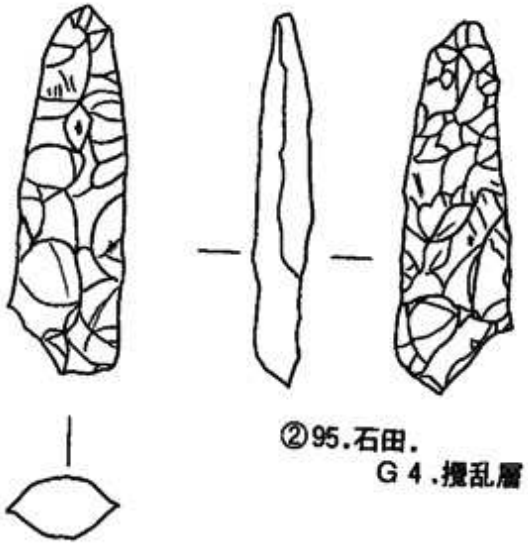
〔第3次〕	6号住居跡カマド	土師器片 163	約11世紀	カマド内に散布	意図的でない
(1995)	5号住居跡内カマド	土師器片 10	約11世紀	(カマド内)に散布	同上

※年度の覧の（ ）内は、出土した破片数である。　(細片を含む)

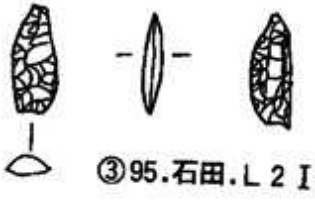




①95.石田.
J－5.3号井戸内



②95.石田.
G4.攪乱層



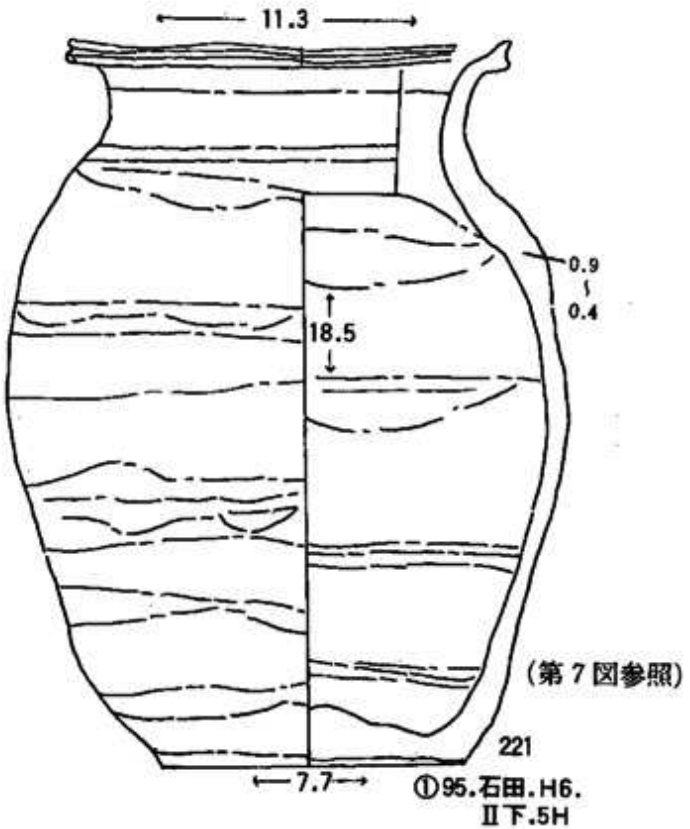
③95.石田.L2Ⅰ

0 5cm

0 5cm

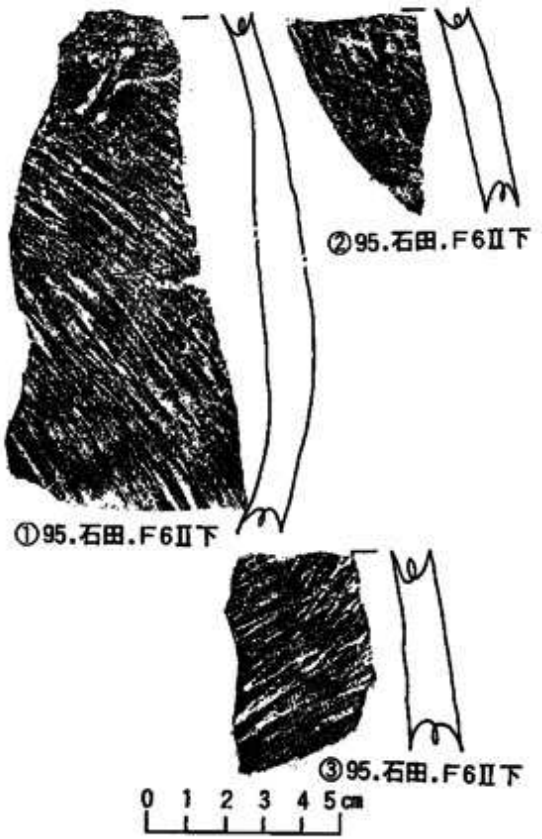
①掻器・②石槍・③石鏃

須恵器（広口壺）　第13図－2



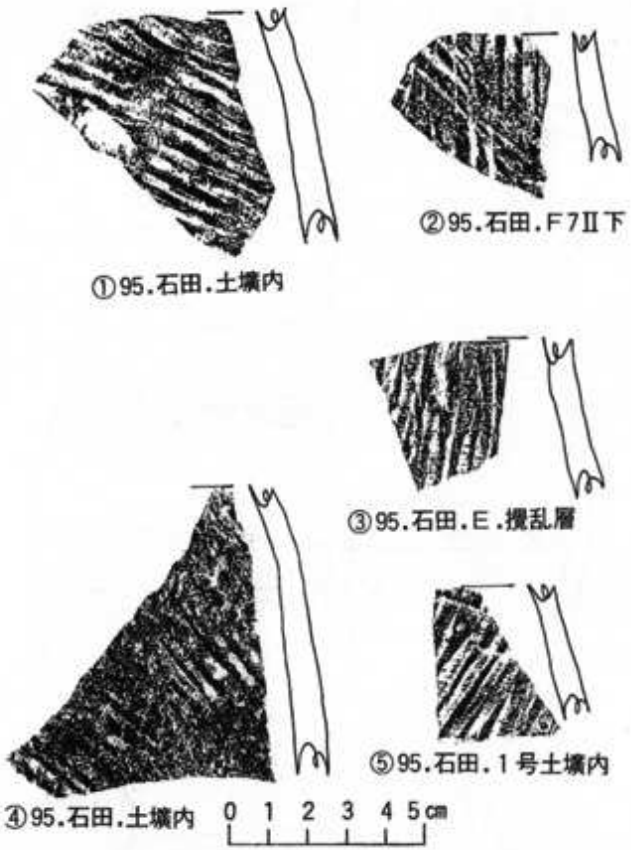
①広口壺(このものの出土は珍らしい)、第Ⅴ号住居跡南東角の床面よりⅥ層出土。

須恵器（甕）　第13図－3



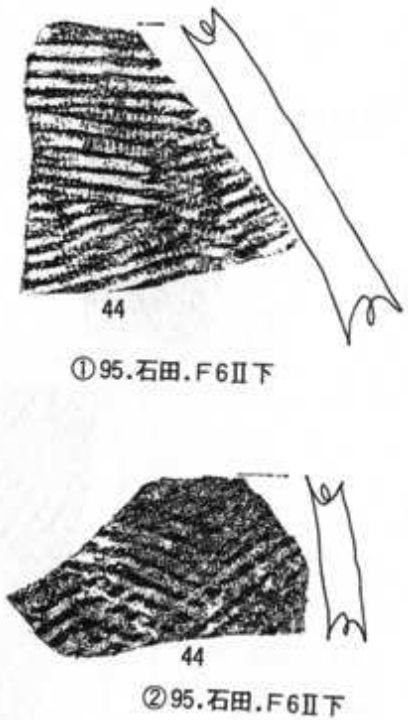
①②③→須恵器（甕）

須恵器（甕）　第13図－4

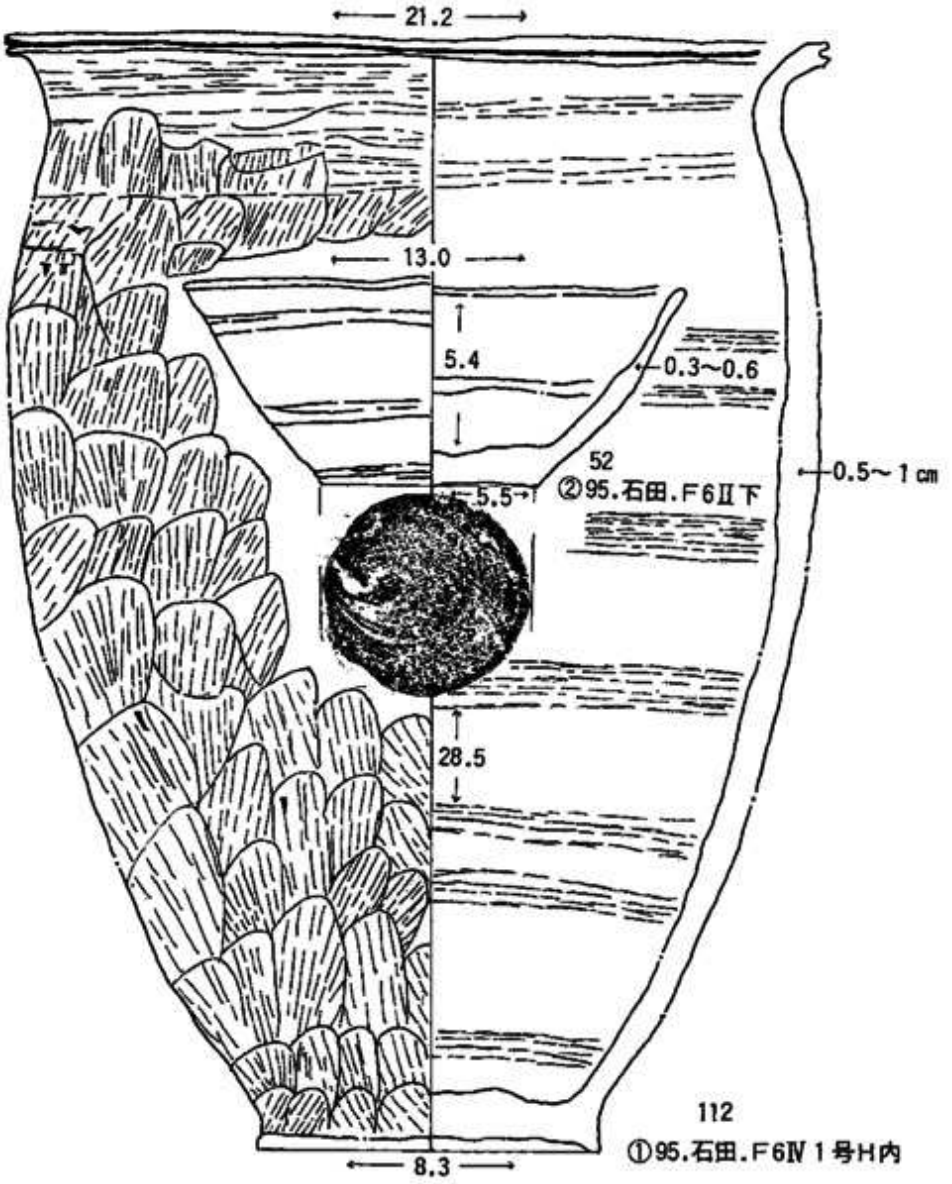


①～⑤→須恵器（甕）

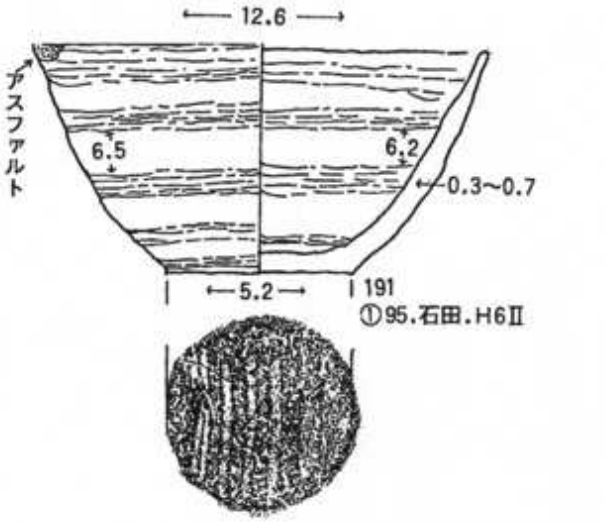
須恵器（甕）　第13図－5

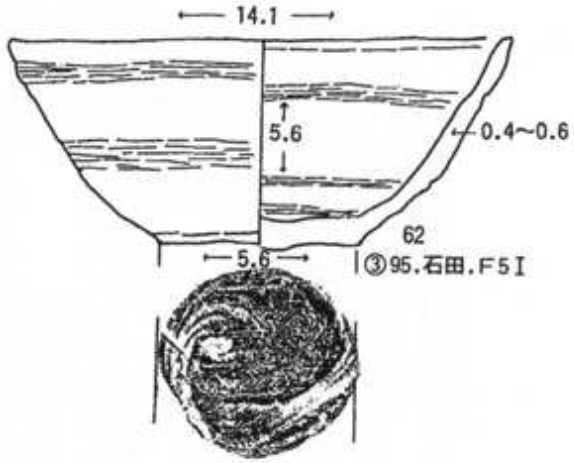


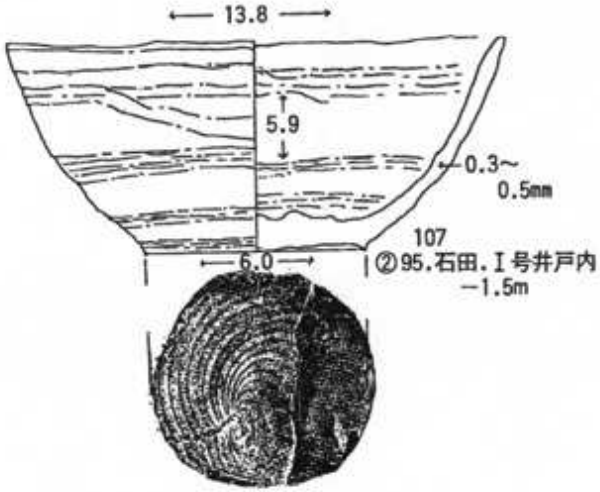
①②→須恵器（甕）

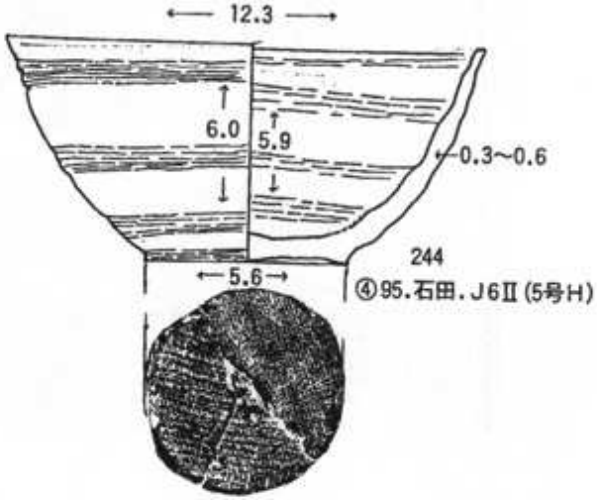

21.2
13.0
5.4
0.3～0.6
52
②95.石田.F6Ⅱ下
0.5～1cm
5.5
28.5
112
①95.石田.F6Ⅳ1号H内
8.3

①②→土師器（甕・坏）


12.6
アスファルト
6.5
6.2
0.3～0.7
5.2
191
①95.石田.H6Ⅱ

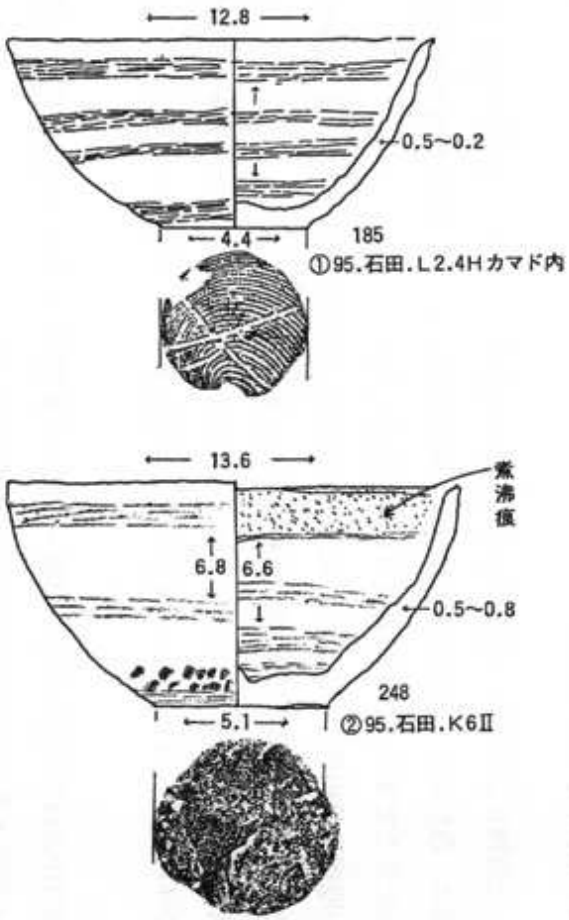

14.1
5.6
0.4～0.6
5.6
62
③95.石田.F5Ⅰ


13.8
5.9
0.3～
0.5mm
6.0
107
②95.石田.Ⅰ号井戸内
－1.5m


12.3
6.0
5.9
0.3～0.6
5.6
244
④95.石田.J6Ⅱ(5号H)

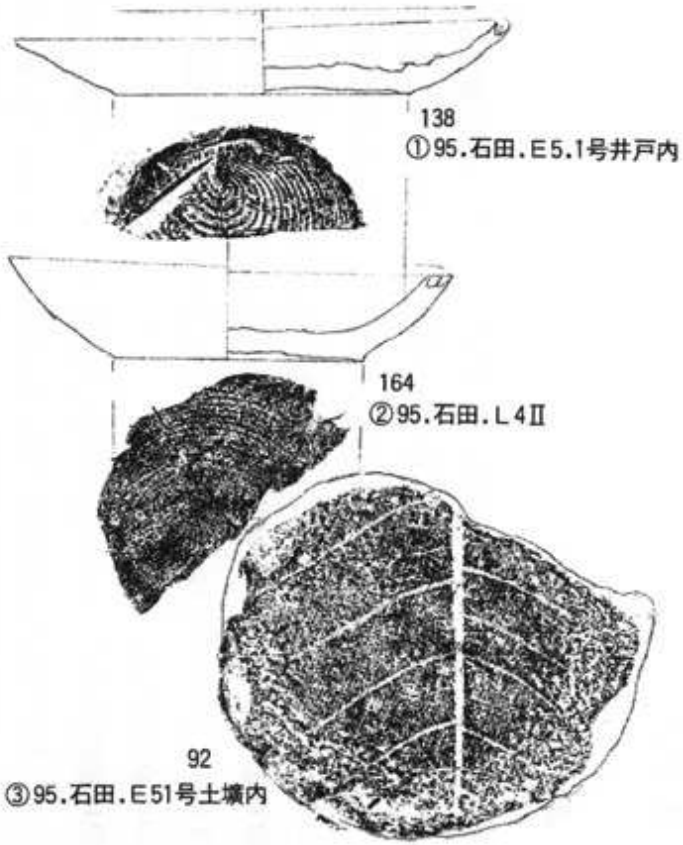
①～④→土師器（坏）

土師器（坏）　　第13図－8



①～②→土師器（坏）

土師器（坏・甕）　　第13図－9



①～②→土師器（坏）　③甕

【5】結　び（総括）

第1節　遺構について

・検出した遺構については、遺構の一覧表に示したように、竪穴式住居跡（ＳＴ）・平地式住居跡・掘立柱建物跡（ＳＢ）・井戸跡（ＳＥ）・土壙（ＳＫ）・地床炉（ＳＦ）等にわけられる。これらの遺構の年代は、竪穴式住居跡は、須恵器の年代や土師器の年代があてられる（平安時代）。平地式住居跡については、第Ⅳ層の上面を生活面とすれば、11 世紀の年代、掘立柱建物跡については、中世の年代が与えられよう。また、井戸跡については、これらの年代のどれかに当てはめられよう。但し、井戸跡からは、土師器の出土が多く平安時代の可能性がある。

・また、掘立柱建物跡の柱穴について述べておく必要があろう。柱穴の掘り方を観察すると、掘り方は、方形で柱は、丸柱であった。さらに、掘り方が方形で、柱も方形なものもあり、掘立柱建物跡が確認できた 2 棟だけでなく他にも所在する可能性があることを指摘しておきたいとおもう。

・これらの遺構の所在する地形は、飯詰川の河岸段丘上にある。地形を観察すると、現在の飯詰小学校の台地は、標高約 33m あって、河岸段丘を形成している。

第2節　出土遺物について

・出土した遺物は、年代別一覧表に示したとおりであるが、若干の解説をすることにする。須恵器は、器形によって甕形と長頸（細口）壷にわけられるが、特筆すべきは、広口壷が出土したことである。また須恵器の坏形も出土した。

・五所川原市の前田野目地区や持子沢地区の窯では、須恵器の広口壷は、その組成に無いものであろう。勿論よその地区から移入されたもののようである。

・第１次の調査では、土師器の坏形土器のみが出土していた。第２次・第３次の調査では、甕形や坏形が多く出土した。土師器の出土は最も多く、平安時代の中葉のもののようである。

・出土品の中には中国製の青磁や白磁・銭貨・日本製では、越前・染付（伊万里－17世紀、近世）・唐津・瀬戸・美濃等の中世のものが出土している。

・さらに、伊万里・織部焼等の日本製のものも出土した。この伊万里・織部焼は、19世紀

～20世紀のもので極く新しいものであろう。

・このように、「石田遺跡」は単なる遺物の包蔵地でなく、平安時代から中世、及び近世にかけて永住した土地であったことが発掘の結果判明したものである。

〔発掘区全影〕 ―その1　　写1

①

（南方より）

②

①②＝発掘区全影　　（東方より）

〔発掘区全影〕 ―その2　　（消防車より）　　写2

①

①②＝発掘区全影

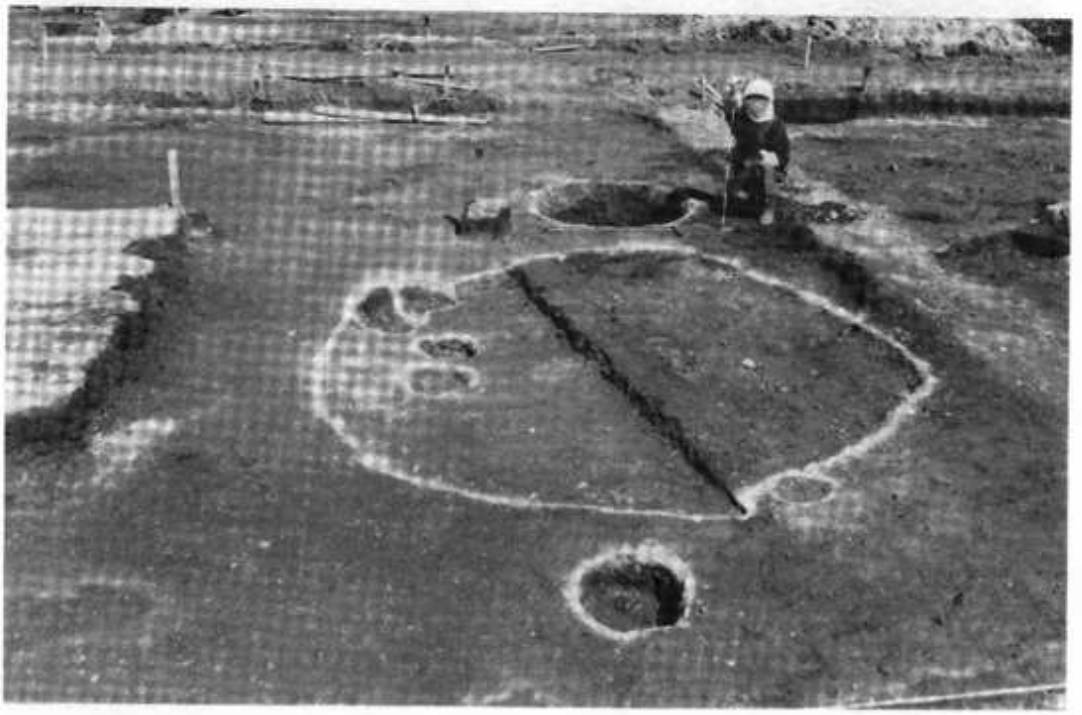
②

〔第１号、第２号住居跡〕

写３

①

②



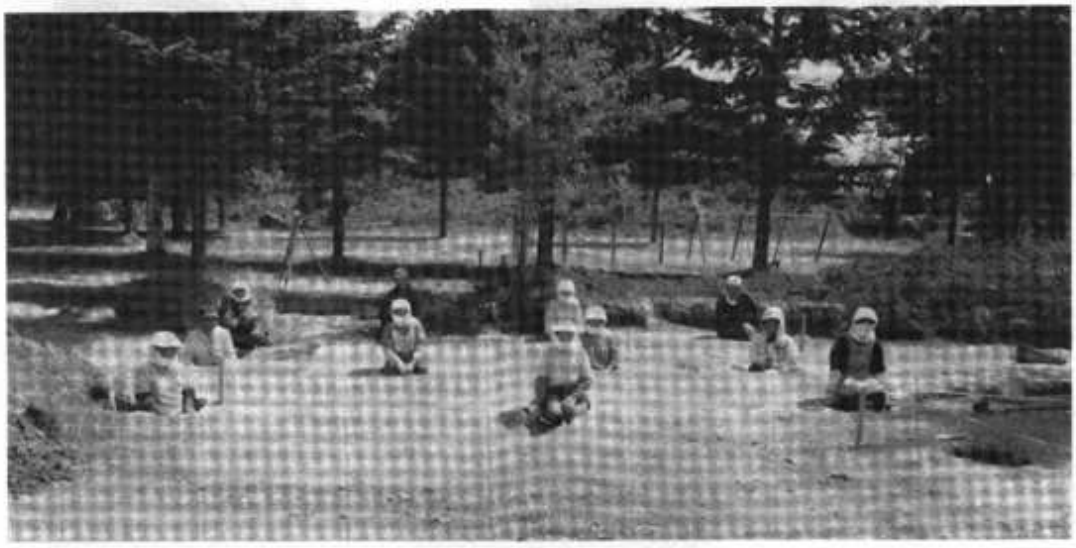
①→第１号住居跡．②第２号住居跡

〔掘立柱建物跡〕 写4

①

（北方より）

②



（北方より）

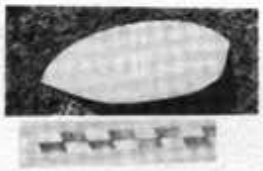
①＝2K×2K．②＝2K×3K（K＝間）　※ 1間＝6.6尺（約2m）

①

②

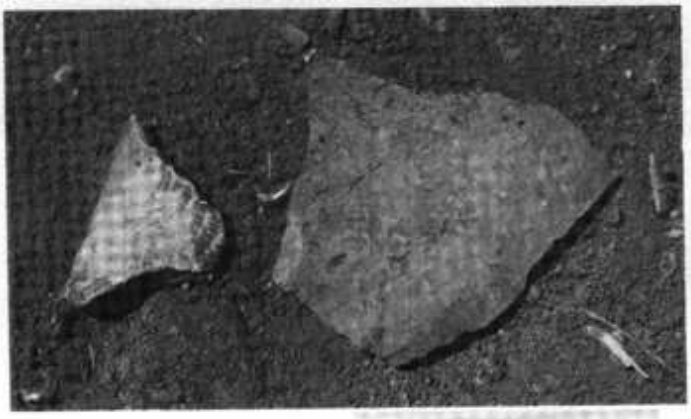
③

④



⑤

⑥

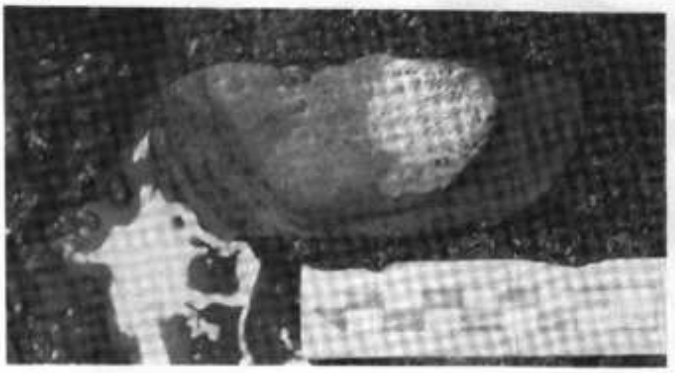


①須恵器.②須恵器(坏).③伊万里焼.④皿(同左)
⑤伊万里.⑥越前焼

①

②

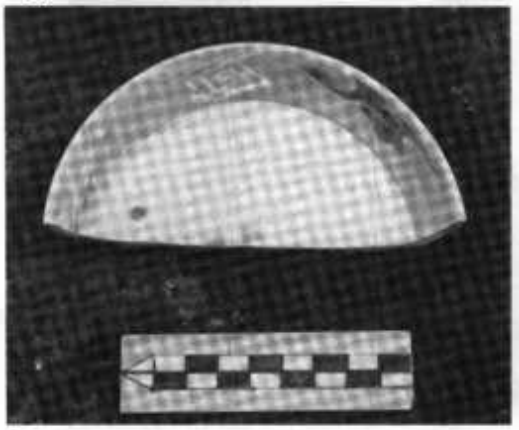
③



④

⑤

⑥



⑦

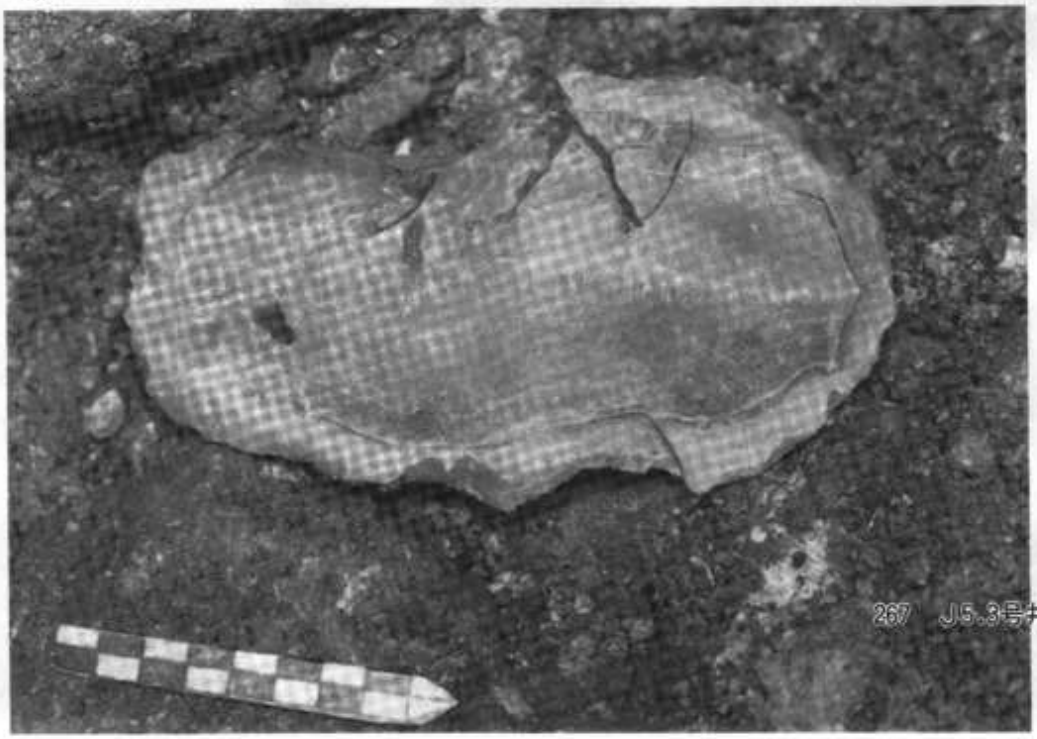
⑧

①～②土師器.③土師器(坏).④キセル.⑤土師器.⑥染付.⑦瀬戸・美濃.⑧伊万里焼

①

6Hカマド跡内

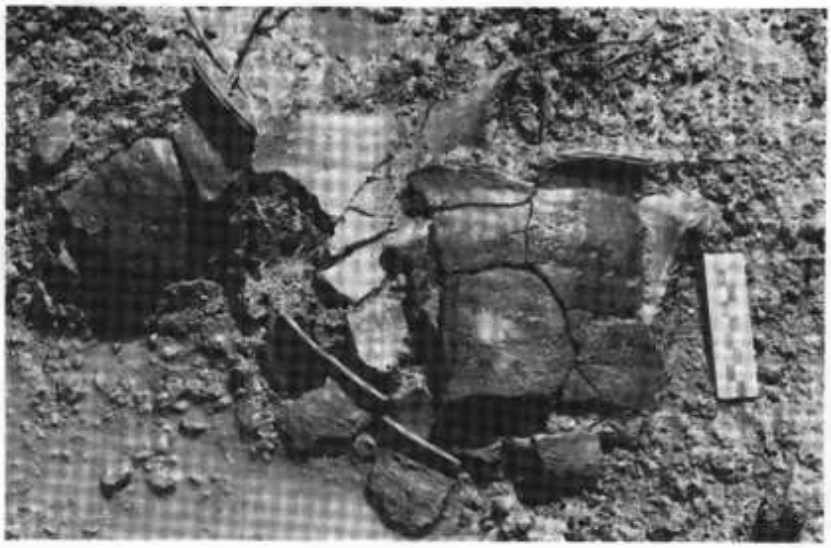
②



267　J5.3号井戸内

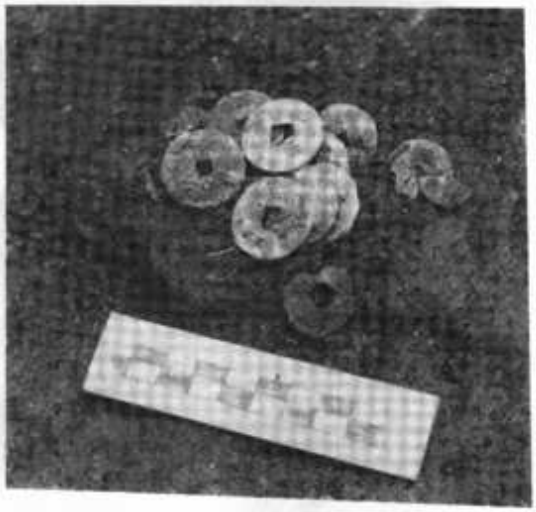
①土師器.②エンドスクレーパー

①

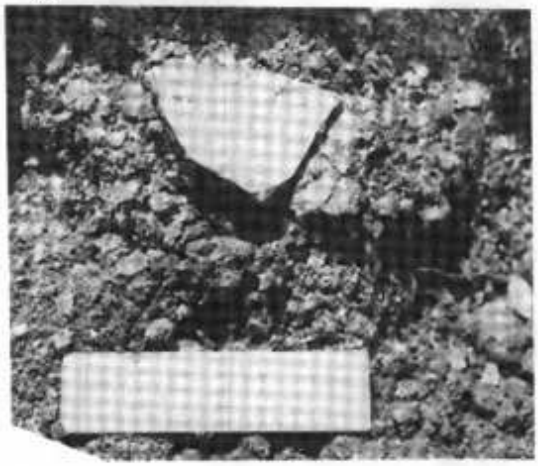


②

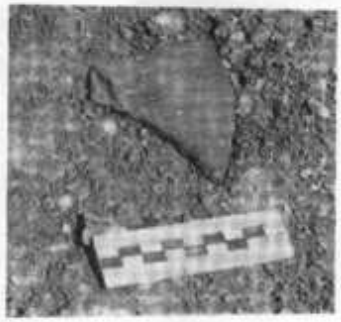
③



④

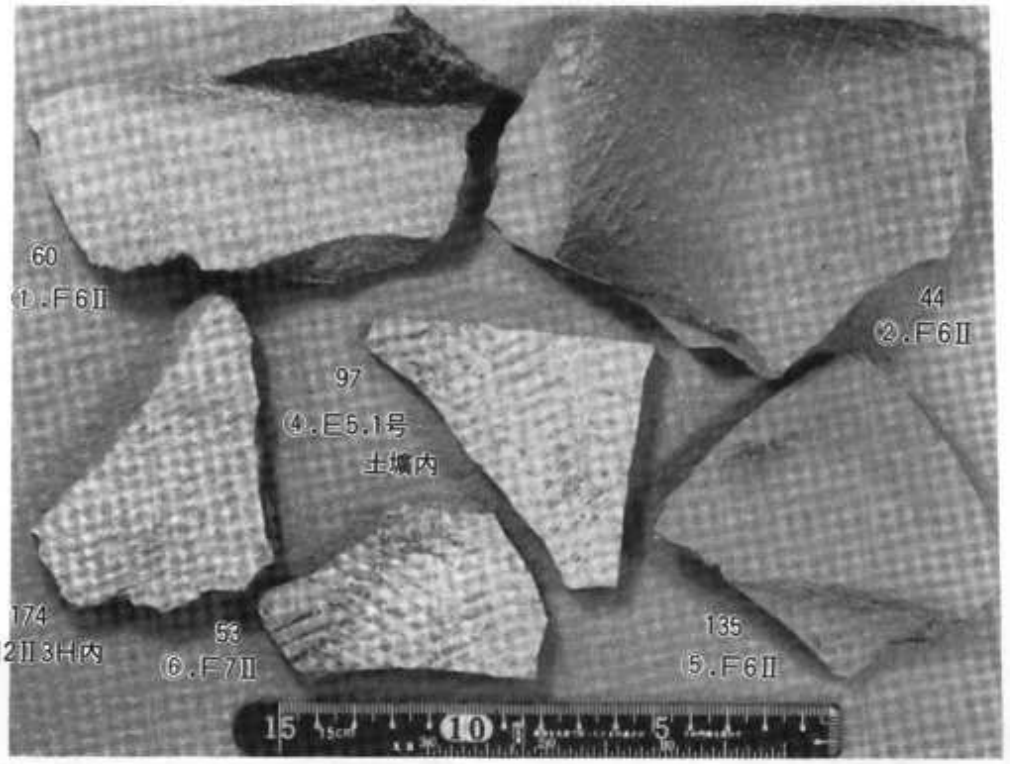


⑤

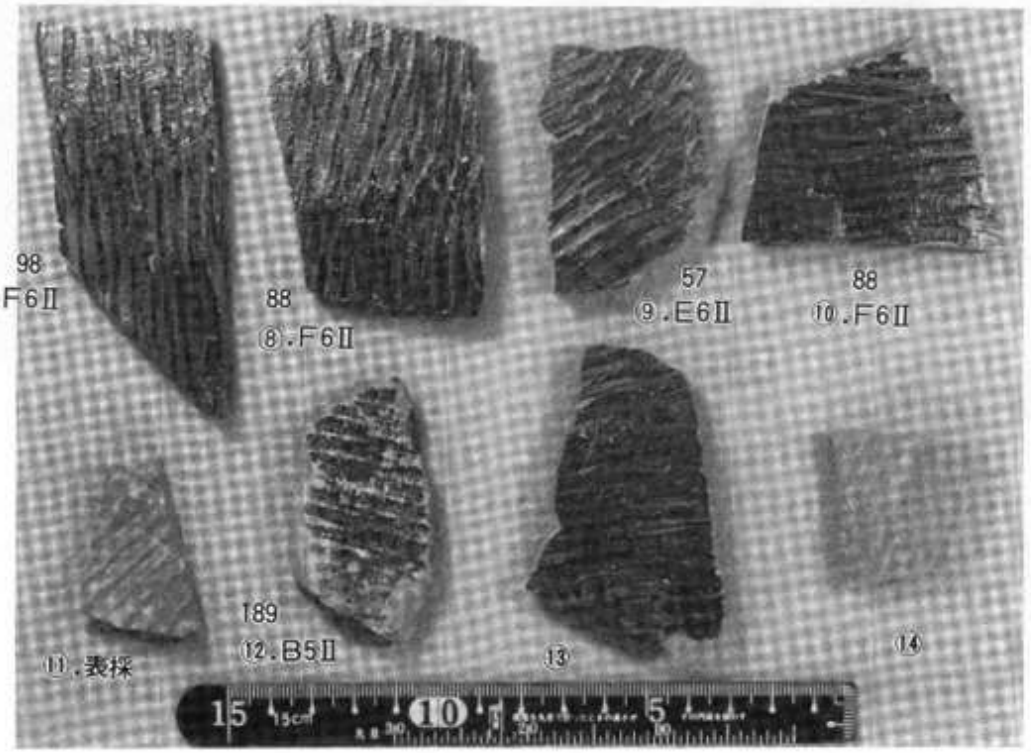


①土師器(甕).②土師器(甕底部).③銭貨.④越前焼.⑤須恵器(甕)

①

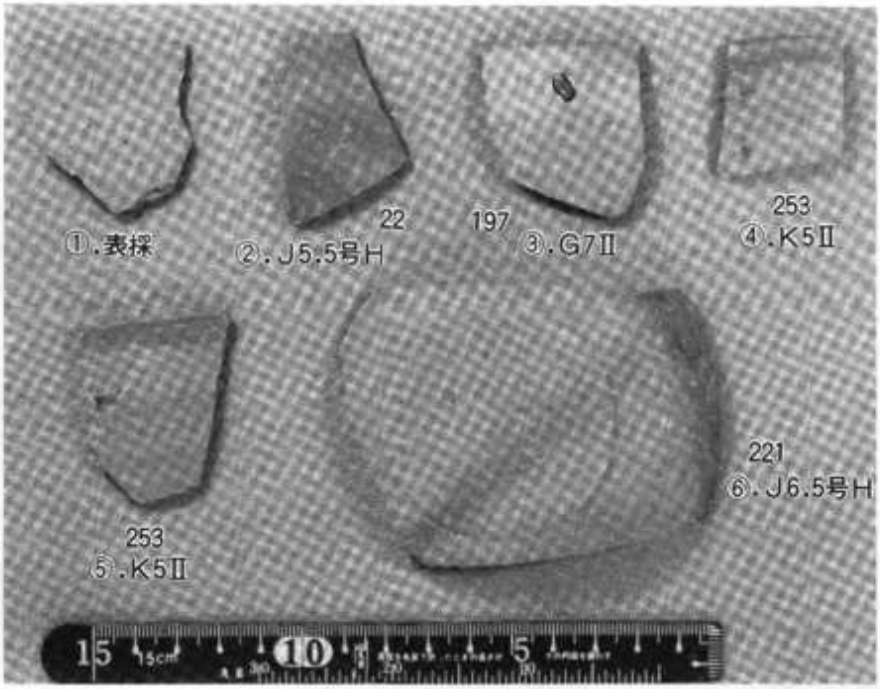

60
①.F6Ⅱ
44
②.F6Ⅱ
97
④.E5.1号
土壙内
174
③. H2Ⅱ3H内
53
⑥.F7Ⅱ
135
⑤.F6Ⅱ
15
10
5

②


98
⑦.F6Ⅱ
88
⑧.F6Ⅱ
57
⑨.E6Ⅱ
88
⑩.F6Ⅱ
189
⑫.B5Ⅱ
⑪.表採
⑬
⑭
15
10
5

①～⑭須恵器（甕）

①



②

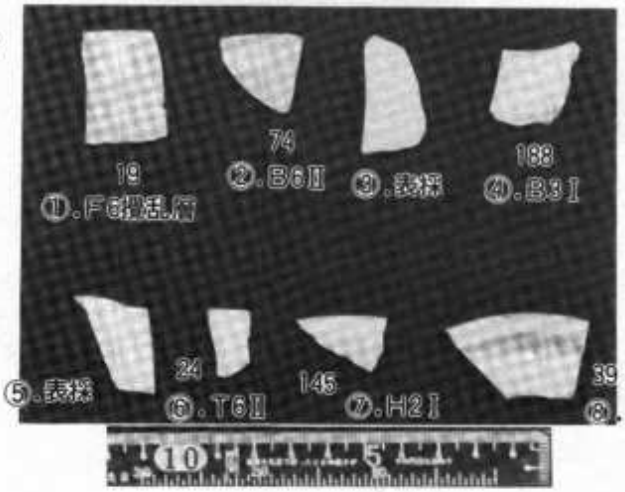
①～⑥＝坏形須恵器.⑦～⑭＝須恵器長頸(細口)壺

①

← 再掲

6.第3号井戸内

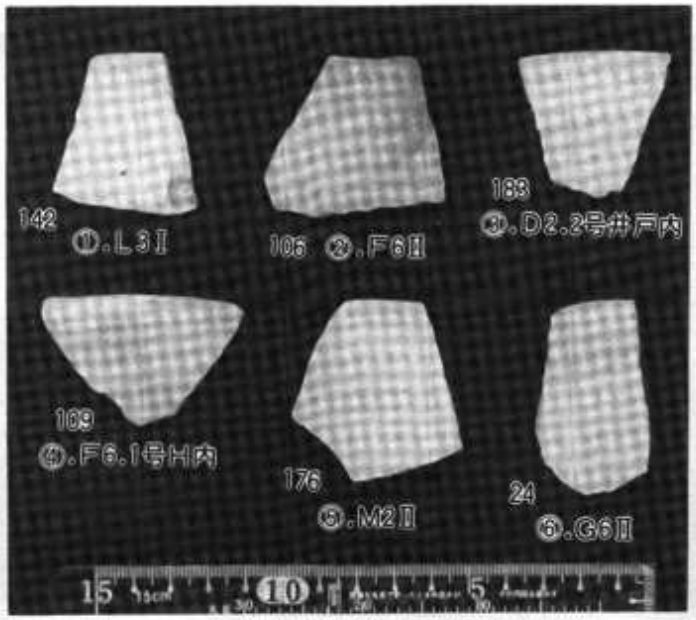
②



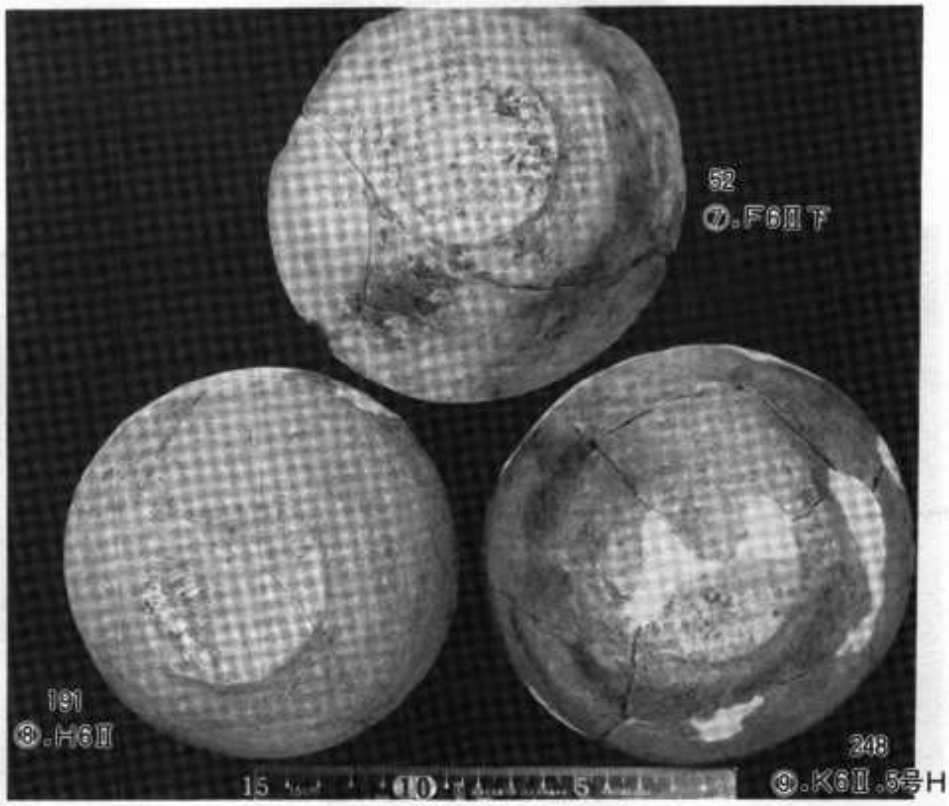
①＝縄文土器及び石器（1～6）

②－①.④.⑦.⑧灰釉（瀬戸・美濃）　⑤.⑥白磁

①

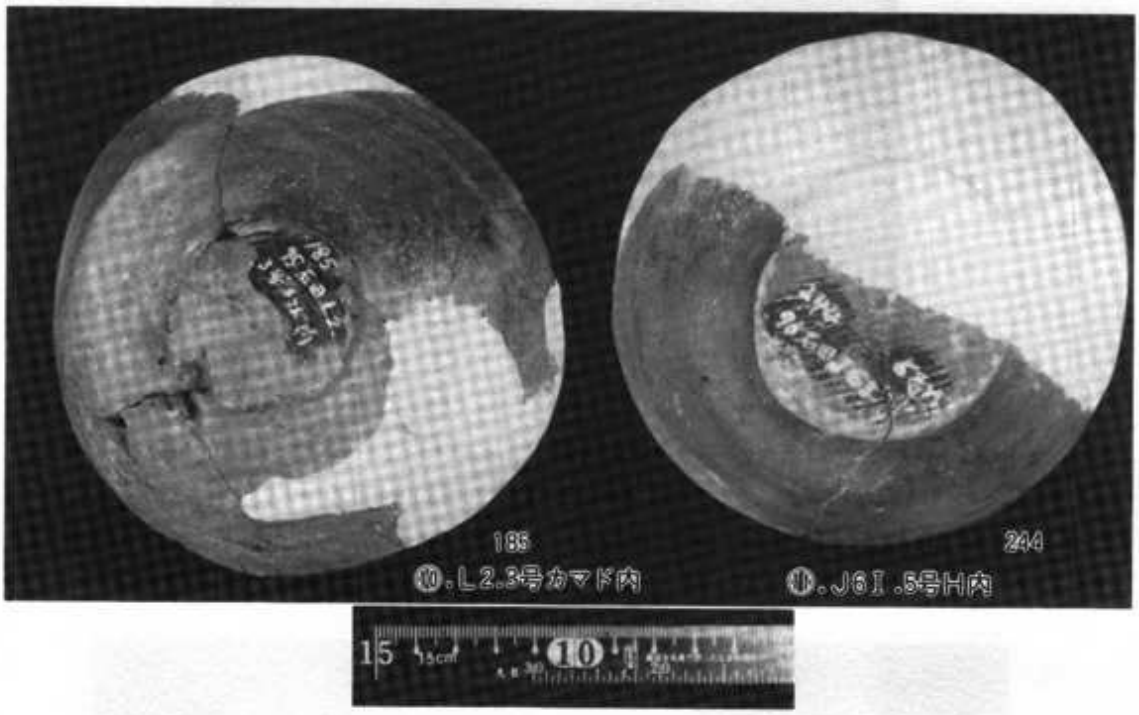


②

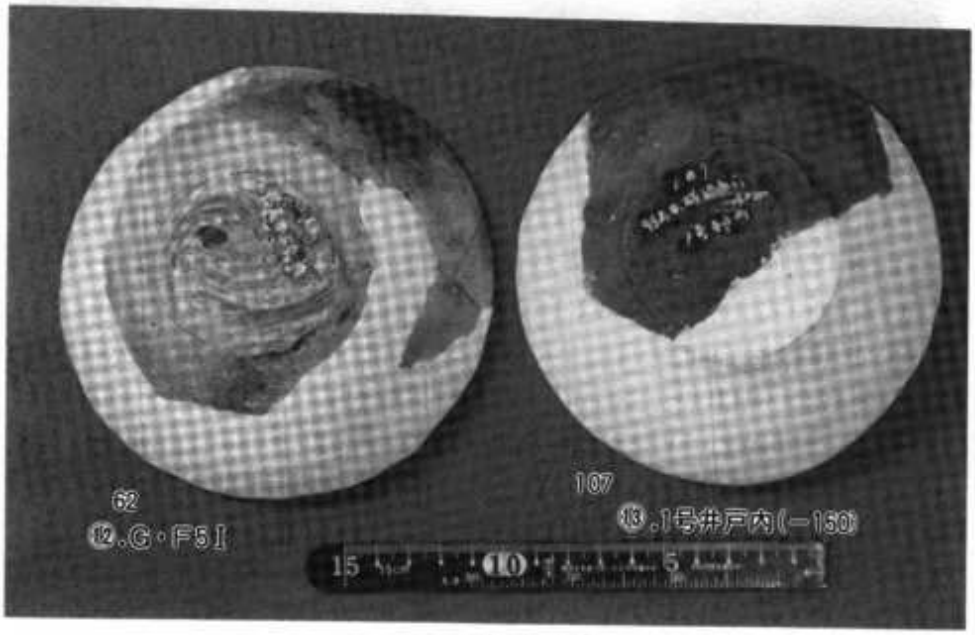


①～⑥土師器(坏).⑦～⑨土師器(坏)

①

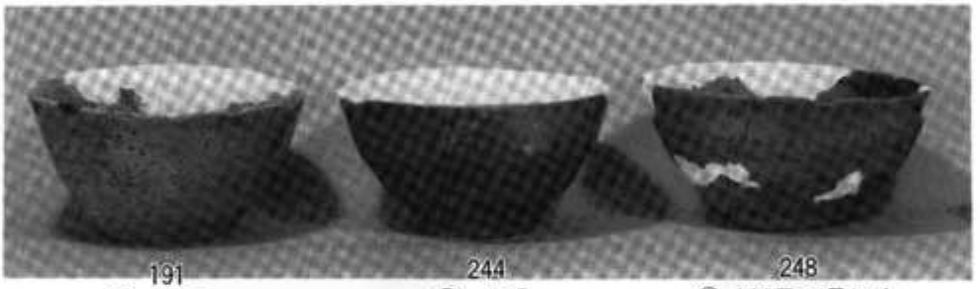

185
⑩.L2.3号カマド内
244
⑪.J6Ⅰ.5号H内
15
10

②


62
⑫.G・F5Ⅰ
107
⑬.1号井戸内(－160)
15
10
5

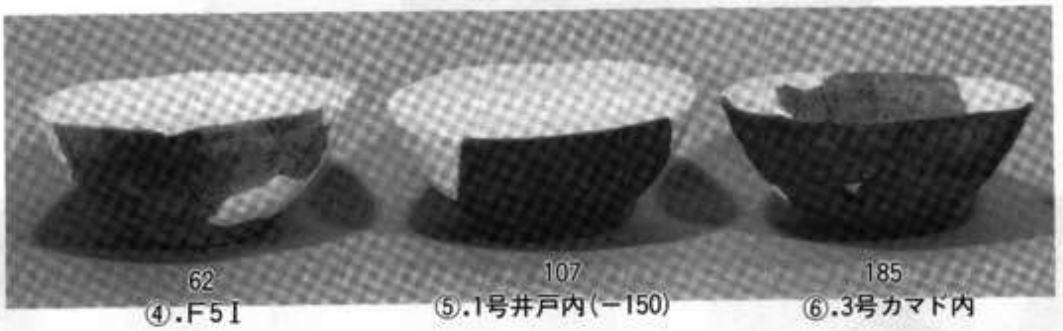
⑩～⑬土師器（坏）

①



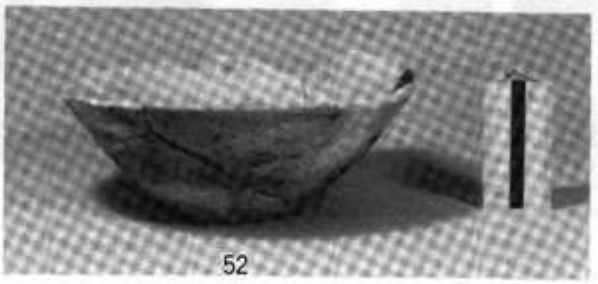
①.H6Ⅱ　②.J6Ⅰ　③.K6Ⅱ.5号H内

②



④.F5Ⅰ　⑤.1号井戸内(−150)　⑥.3号カマド内

③

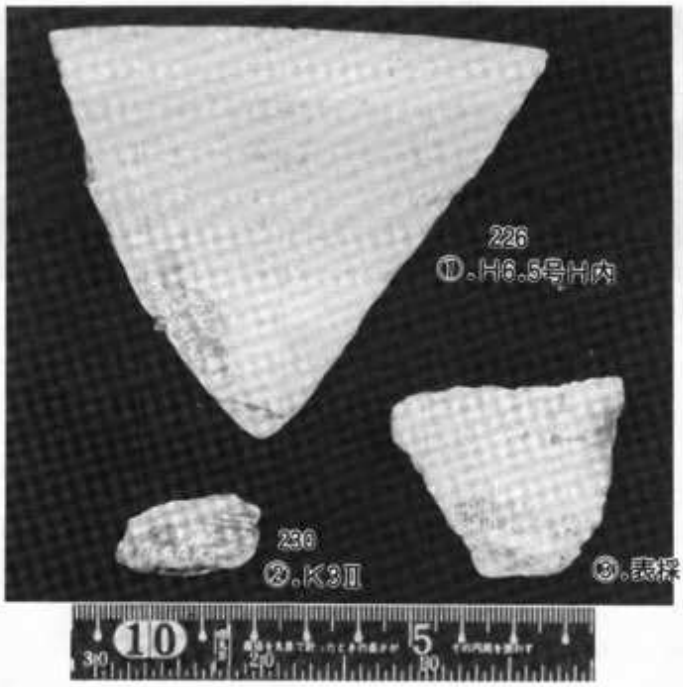


⑦.F6Ⅱ下

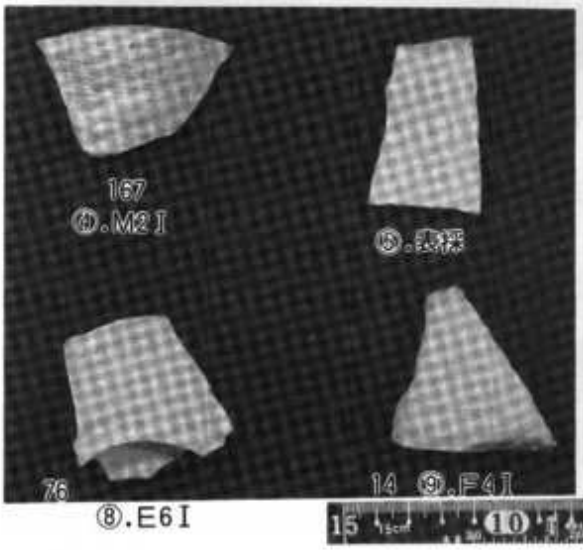
☆ほかに坏形土師器が1個体復原できた。

①～⑦坏形土師器

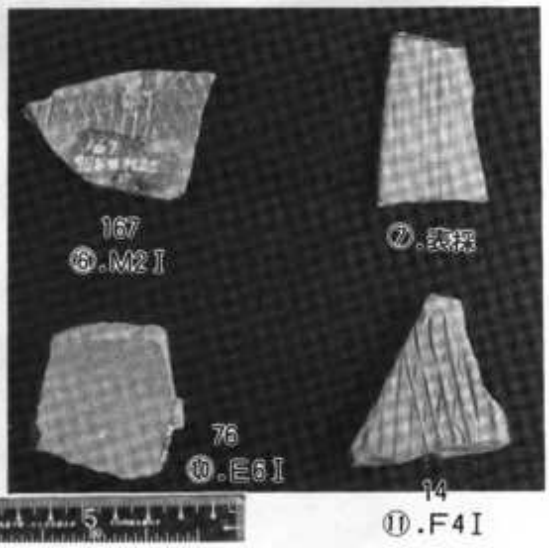
①



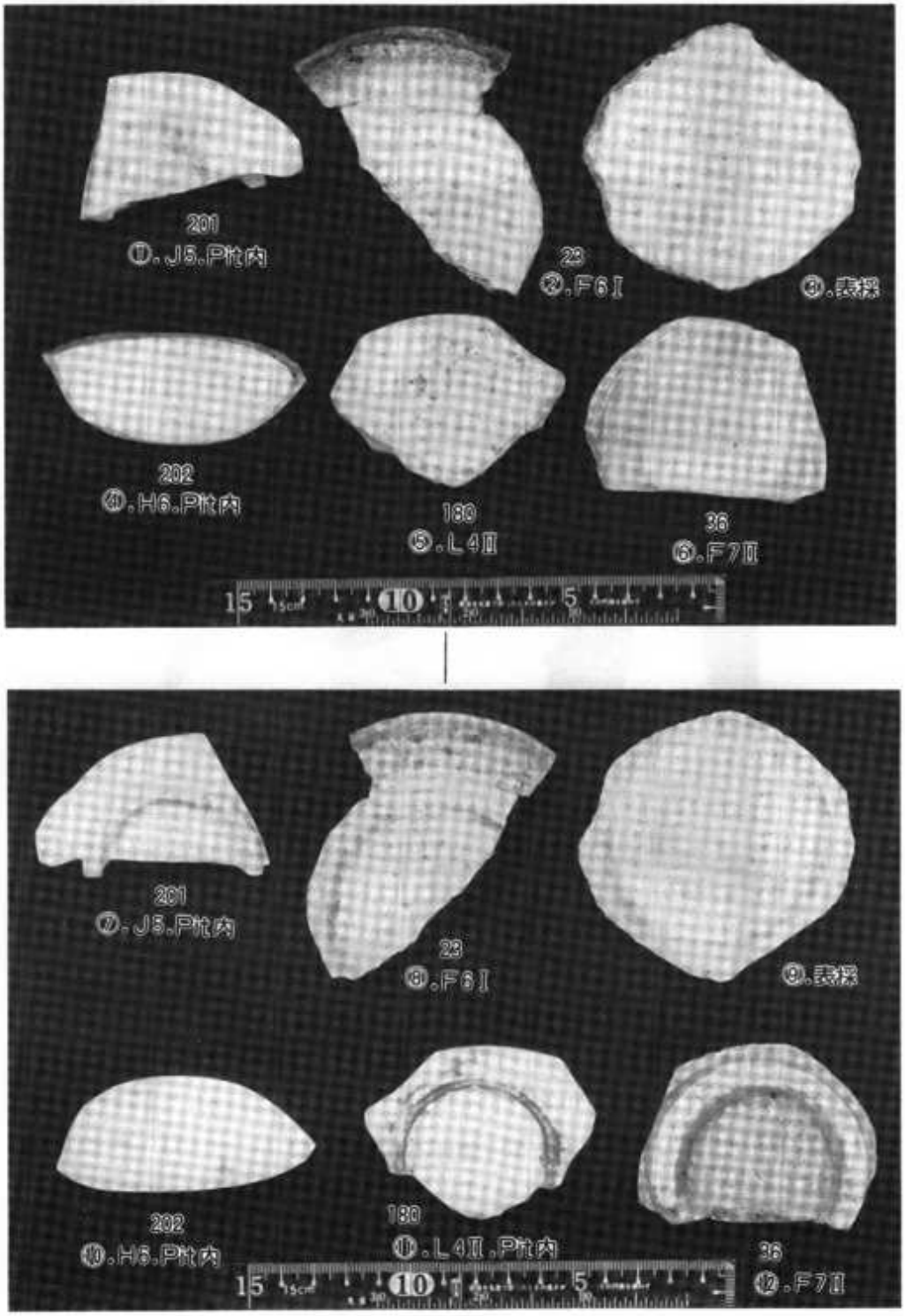
②



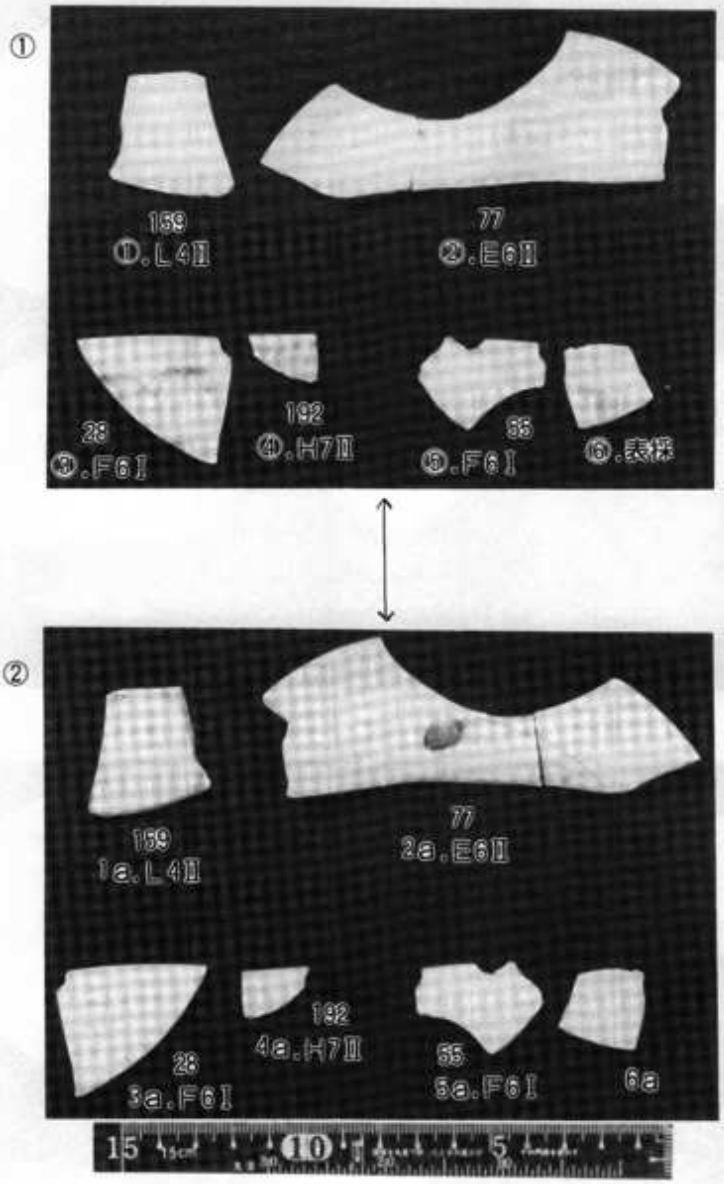
③



①～③擦文土器．④～⑪越前焼．⑥⑦⑩⑪は、④⑤⑧⑨の内側である。（見込み）

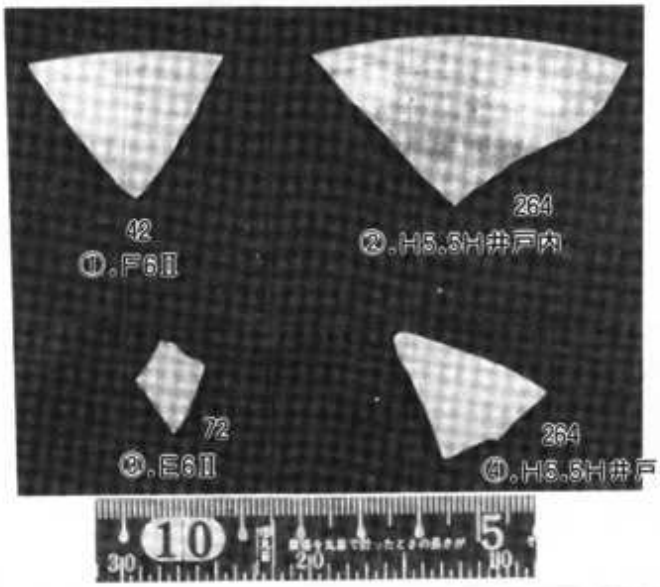


①～⑥唐津焼（①～⑥見込み）.⑦～⑫高台部


①
159
①.L4Ⅱ
77
②.E6Ⅱ
28
③.F6Ⅰ
192
④.H7Ⅱ
55
⑤.F6Ⅰ
⑥.表採
②
159
1a.L4Ⅱ
77
2a.E6Ⅱ
28
3a.F6Ⅰ
192
4a.H7Ⅱ
55
5a.F6Ⅰ
6a
15
10
5

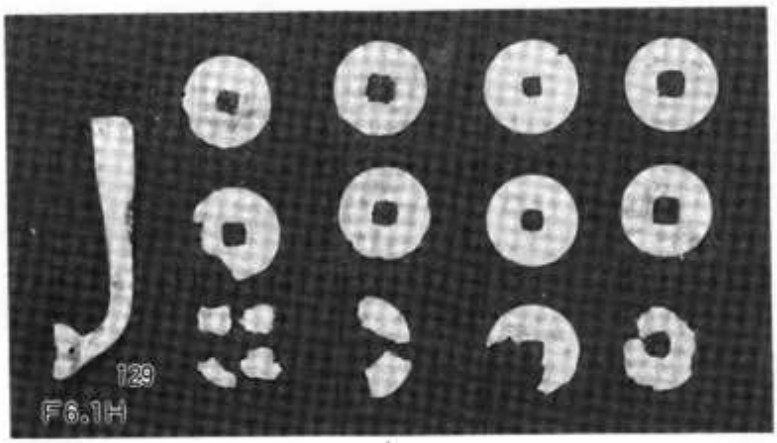
①～⑥－染付(伊万里)

①



②

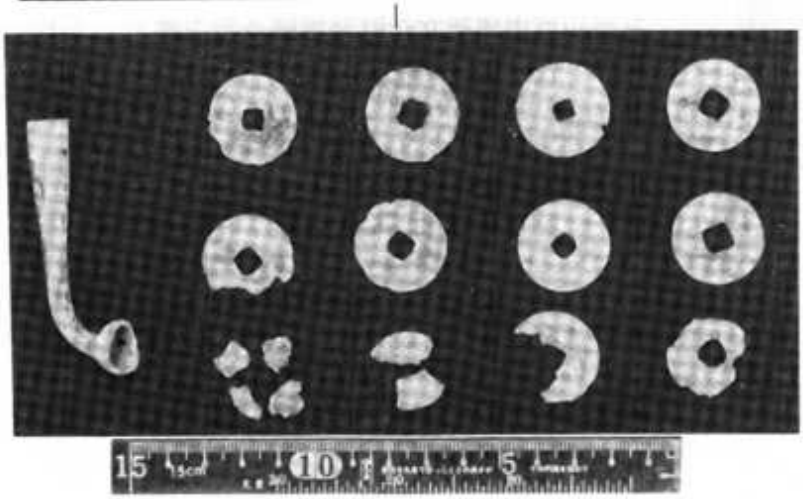
再掲→



（表）

G5Ⅱ下

③



（裏）

①～④織部焼.②表（銭貨・キセル）.③裏面

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書
第 18 集
石 田 遺 跡（第3次）

○発行年月日　平成7年10月31日
○発 行 者　青森県五所川原市教育委員会
代表　教育長　釜 萢　裕
○住　　所　〒037　五所川原市岩木町12番地
TEL　35－2111　内線　555
FAX　34－3192
○印　　刷　㈲ 西 北 印 刷